

名古屋大学小児科臨床研修プログラム
名古屋大学小児科研修医（専攻医）プログラム

2020 年度版

はじめに

名古屋大学小児科に入局し、名古屋大学小児科関連施設にて小児科臨床研修を行う医師が効率的かつ円滑な小児科臨床研修を行えるよう「名古屋大学小児科臨床研修プログラム」を作成した。本プログラムを利用して、有意義な小児科臨床研修に臨んでいただきたい。なお、小児科専門医の取得には日本小児科学会の会員歴が必要であるため、速やかに入会することを勧める。日本小児科学会入会については、日本小児科学会のホームページ (<http://www.jpeds.or.jp/>) を、名古屋大学小児科入局については名古屋大学小児科のホームページ (<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/ped/>) を参考にいただきたい。

2005年1月

名古屋大学大学院 小児科学教室

名古屋大学小児科臨床研修を考えるワーキンググループ

2020年度版の改訂にあたり

2005年に「名古屋大学小児科臨床研修プログラム」を整備して10年以上の年月が過ぎた。当初、本プログラムには小児科各分野のサブスペシャリティー技能習得ができるように各分野のキャリアパスを記載した。しかしながら、名古屋大学小児科とその関連施設だけでは、必要十分な小児科サブスペシャリティーの研修提供することは容易ではないため、その後「愛知県四大学小児科・合同研修プログラム」のもと県内の施設で専門研修が完結できる体制を整えた。2016年度版には2017年度から始まる新専門医制度を踏まえて「名古屋大学医学部附属病院小児科研修医（専攻医）プログラム」を加えて更なるブラッシュアップを行った。本プログラムを利用することで、小児科専門医取得から小児科各分野のサブスペシャリティー技能習得ができるよりよい研修が行えることであろう。

2020年4月

名古屋大学大学院 小児科学教室

名古屋大学小児科 卒後研修委員会

第一部：名古屋大学小児科臨床研修プログラム

目次

I.	名古屋大学小児科の一般目標	-----	1
II.	名古屋大学小児科臨床研修プログラムの目的	-----	1
III.	名古屋大学小児科臨床研修プログラムの管理運営	-----	1
IV.	小児科臨床研修について	-----	2
	1) 標準的な小児科臨床研修コース	-----	2
	2) 定期的に行われる教育関連行事	-----	3
	① 新入局者オリエンテーション	-----	3
	② 木曜会	-----	3
	③ 名古屋大学小児科関連病院新生児カンファレンス	-----	4
	④ 初心者向け勉強会	-----	4
	⑤ 小児集中治療勉強会	-----	4
	⑥ 東海小児神経研究会	-----	5
	3) 名大病院研修について	-----	5
	・研修時期・研修期間	-----	5
	・研修方法	-----	5
	・学会発表	-----	5
	・名大病院研修における主な教育関連行事	-----	5
	・各診療グループの診療の特徴について	-----	6
	・各診療グループの症例検討会、勉強会などのスケジュール	-----	8
V.	経験するべき症候・疾患	-----	9
VI.	研修の自己評価、指導医評価	-----	9
VII.	専門医取得プログラム	-----	9
	① 小児科専門医制度	-----	10
	② 小児科各分野関連の専門医（認定医）制度について	-----	11
	日本血液学会	-----	12
	日本造血細胞移植学会	-----	13
	日本小児血液・がん学会	-----	14
	日本アレルギー学会	-----	16

日本感染症学会	-----	18
日本小児神経学会	-----	19
日本周産期・新生児医学会	-----	21
日本小児循環器学会	-----	24
日本小児腎臓学会	-----	28
日本小児内分泌学会	-----	30
日本小児心身医学会	-----	31
日本小児臨床薬理学会	-----	32
日本小児遺伝学会 日本人類遺伝学会 日本遺伝カウンセリング学会	-----	32
日本小児東洋医学会	-----	34
日本小児救急医学会	-----	34
日本小児リウマチ学会	-----	35
日本てんかん学会	-----	35
日本臨床神経生理学会	-----	37
日本透析医学会	-----	38
日本移植学会	-----	38
日本臨床腎移植学会	-----	39
ICD (Infection Control Doctor)	-----	40
日本臨床腫瘍学会	-----	41
日本集中治療医学会	-----	41
VIII. サブスペシャリティー技能習得について	-----	42
血液・腫瘍分野	-----	43
アレルギー分野	-----	44
感染症分野	-----	45
神経分野	-----	46
周産期・新生児分野	-----	46
免疫分野	-----	47
循環器分野	-----	47
腎臓分野	-----	48

内分泌分野	-----	48
代謝分野	-----	49
遺伝分野	-----	49
小児救急・集中治療分野	-----	49

名古屋大学小児科臨床研修プログラム

I. 名古屋大学小児科の一般目標

- ・幅広く小児医療・小児保健に貢献するために、すぐれた小児科医を育成し、地域の小児医療の充実を図り、小児医学の進歩に寄与する。
- ・一般目標の実現を目指して以下の事を実践する。
 - 1) 幅広い臨床能力を持つ小児科医を育成する。これからの小児科医は、出生前から成人に至る全課程を総合的にとらえ、成育医療の視点に立った医療の実践を心掛ける。
 - 2) 大学附属病院、関連病院が一体となり、各分野における最高水準の先端医療を推進するとともに、それにあたる人材の育成、確保に努める。
 - 3) 明日の医学を創り出すのに必要な情報を世界に発信するとともに、研究能力を有する人材を確保する。
 - 4) 社会に対し、小児医療、小児保健の重要性を訴え、さらに小児科医の社会的地位の向上に努める。
 - 5) 3つの使命である、教育、診療、研究の推進について国内の他施設と協調し、さらにグローバルな視点にたち、国際交流を図る。

II. 名古屋大学小児科臨床研修プログラムの目的

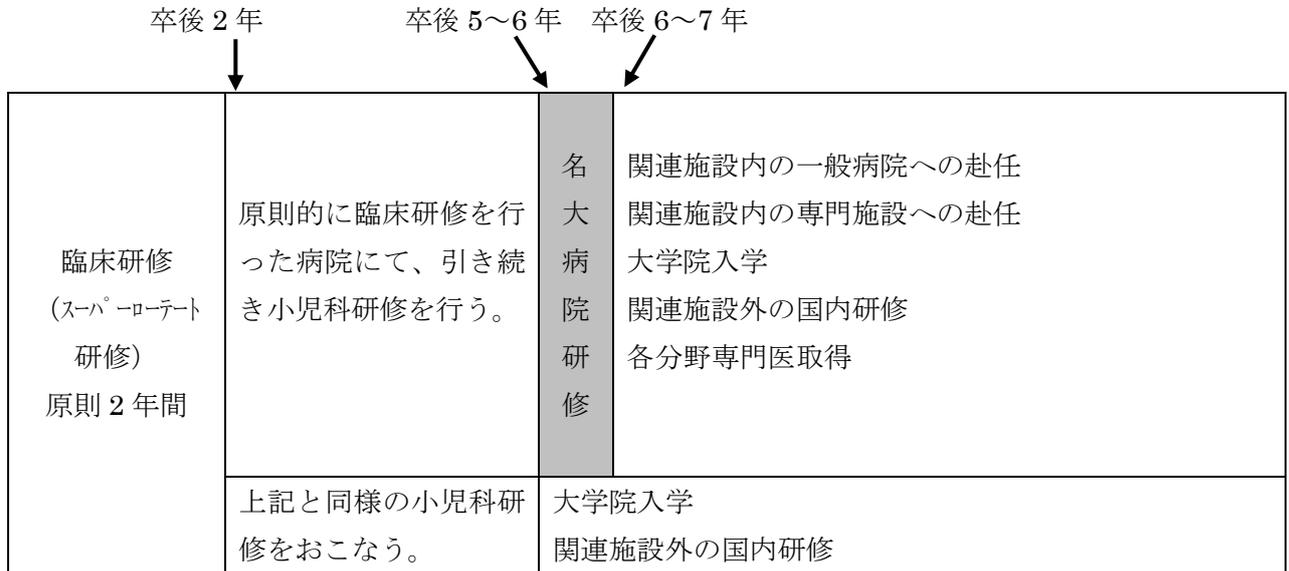
- ・本プログラムは上記の「名古屋大学小児科の一般目標」の実践を目指すために作成された臨床研修プログラムである。
- ・小児科医として幅広い臨床経験を積み、小児科診療の基礎的知識・手技を習得し、小児科専門医を取得するための効率よい臨床研修を提供する。
- ・小児科専門医を取得後に、各分野専門医取得のための研修に速やかに移行できるように、各専門分野の専門医取得についての情報を同時に提供する。
- ・小児科臨床研修を通じて、臨床医としての基本的姿勢、病児とその家族に接する態度を習得できるようにする。

III. 名古屋大学小児科臨床研修プログラムの管理運営

- ・本プログラムの管理責任者は名古屋大学大学院小児科学教授とする。
- ・関連病院部長会などを通して、定期的に本プログラムの研修内容評価、再検討をおこなう。
- ・専門医関連の情報については、1年に1回の更新をおこなう。
- ・本プログラムの修正、訂正などは、名古屋大学小児科卒後研修委員会を中心に作業を行う。

IV. 小児科臨床研修について

1) 標準的な小児科臨床研修コース



卒後5~6年

(註) 網掛け部分は名大病院研修の期間

- ・ 卒後2年間は各研修病院の臨床研修プログラムに沿い、ローテーション研修を行う。
- ・ ローテーション研修終了後は、原則的に研修病院の小児科にて小児科研修を開始する。小児科研修に適していない病院である場合は、異動を考慮する。
- ・ 原則的に新生児研修は必須とする。研修中に新生児研修が行えない場合は必要に応じて異動を考慮する。
- ・ 原則的に卒後5~6年（小児科医として3~4年目）に、名古屋大学医学部附属病院小児科にて研修（以下、名大病院研修）を行う。名大病院研修についての研修内容については別に記す。
- ・ 卒後5~6年に大学院入学、小児病院などへの国内研修をとるコースも設けるが、ある基準を設けて、その個人を評価しその上で許可をする事を条件とする。
- ・ 女性医師が出産・育児にあたり小児科医としてのキャリアがとぎれることがないように、名古屋大学小児科医局では関連病院と協力をして「子育て支援制度」を設立し、運用をしている。詳細は管理責任者の副医局長に問い合わせいただきたい。
- ・ 愛知県内の四大学小児科が協力をして、「愛知県四大学小児科・合同研修プログラム」を作成し、各専門分野の研修を行う体制を整えた。詳細は医局長に問い合わせいただきたい。

- ・ 2017 年度から開始になる、新しい専門医制度に基づいた名古屋大学医学部附属病院小児科研修医（専攻医）プログラム（第二部参照）では、卒後 3～5 年の 3 年間の研修期間の内、卒後 5 年目に名大病院で 6 カ月間の研修を行うこととしている。
- ・ なお、名古屋第一赤十字病院、安城更生病院、名古屋記念病院、岡崎市民病院、公立陶生病院、あいち小児保健医療総合センターの各病院では、独自の小児科研修医（専攻医）プログラムを有している。詳細については、各病院に照会されたい。

2) 定期的に行われる教育関連行事

① 新入局者オリエンテーション

新入局者を対象に、宿泊形式の研修会を開催する。オリエンテーションでは小児科、関連診療科（小児外科など）の基礎的講義をおこなう。

「新入局者オリエンテーション」の実例（2019 年度実施）

日 時：2019 年 6 月 15 日（土）～6 月 16 日（日）

場 所：サンプラザシーズンズ（愛知県名古屋市名東区藤里町 1 6 0 1）

期 日	時 間	講 師	内 容
6/15	13：10～13：50	早川昌弘先生	新生児
	13：50～14：30	三浦清邦先生	障がい児
	14：45～15：25	八田容理子先生	内分泌
	15：25～16：05	村松友佳子先生	遺伝
	16：20～17：00	伊藤嘉規先生	ウイルス
	17：00～17：20	谷口顕信先生	医系技官
	17：20～18：00	高橋義行先生	血液・腫瘍
6/16	08：20～09：00	加藤太一先生	循環器
	09：00～09：40	多代篤史先生	腎臓
	09：50～10：30	梶田光春先生	代謝
	10：30～11：10	森下雅史先生	アレルギー
	11：20～12：00	夏目 淳先生	神経

② 木曜会

関連病院から治療、診断に難渋している症例、希少な症例、若手医師の教育上有益と思われる症例を自由にもちよるインフォーマルな症例検討会で、隔月、木曜日の夕刻に名古屋大学小児科の医局で行われる。なお、1 ヶ月間に名古屋大学医学部附属病院に入院した症例の紹介もおこなう。

「木曜会」の実例

場 所：名古屋大学小児科医局

症 例：

- ・発熱、頸部腫脹で受診した 2 例
- ・すっきりしない ITP
- ・感染ごとに肝機能異常高値を呈す児
- ・手足腫脹・発疹・発熱(-) で診断がつけられていない児
- ・異物誤飲の数例
- ・低蛋白血症の一例

③ 名古屋大学小児科関連病院新生児カンファレンス

関連病院臨床症例検討会と同様に毎回 1 つの新生児領域におけるテーマを決め、その疾患・病態について議論を深めている。年に 2 回開催されている。

「名古屋大学小児科関連病院新生児カンファレンス」の 2019 年度実施分

第 36 回関連病院新生児カンファレンス

テーマ：「感染」

世話人：名古屋大学医学部附属病院

④ 初心者向け勉強会

後期研修中の医師を対象とした教育プログラムである。小児科の各分野の基本的な知識をレクチャーする。1 年間に 3 回（6 項目）を行う。

「初心者向け勉強会」2019 年度実施分

- ・発達障害の理解と支援
- ・救急外来で出会う内分泌疾患 その対策ポイント
- ・実地臨床に役立つ喘息・食物アレルギーの大切な話
- ・目からうろこの乳児検診
- ・新生児・乳児の気道疾患について
- ・～熱性けいれんから急性脳炎脳症・てんかん重積まで～

⑤ 小児集中治療勉強会

主にフレッシュ帰局員を中心とした若手医師・病棟スタッフ等を対象に、小児集中治療に関する勉強会を行っている。基本的に 1 か月に 1 回（毎月第 2 木曜日）テーマを細分し、院内のシミュレーションラボで行われる。半期（半年間）で全体を網羅する。開催スケジュールについては、適宜変更がありうる。

【勉強会の実施例】

- 第1回 小児 BLS の復習とチームダイナミクスについて
- 第2回 気道閉塞と気道確保
- 第3回 呼吸障害と人工換気設定
- 第4回 循環障害と敗血症性ショックの復習
- 第5回 中枢神経障害と中枢神経作動薬の選択

⑥ 東海小児神経研究会

2 か月に 1 回、愛知県の四大学および関連病院の医師が小児神経疾患の症例をもちよ
り、名古屋大学医学部附属病院で検討会を行っている。

3) 名大病院研修について

小児科臨床研修の中で名大病院研修を行う意義は、大学教員・医員・大学院生とのつ
ながり（縦のつながり）と同世代のつながり（横のつながり）を形成することと、各研
修病院間の治療の標準化を図ること、国際化への導入、研究への導入である。また、研
修病院で経験できなかった症例を経験して、小児科専門医取得のための研修を補完する
ことも目的の 1 つである。短い研修期間であるが、有意義な研修であると確信している。

・ 研修時期・研修期間：

原則として卒後4～5年（小児科医として3～4年目）に、6カ月間おこなう。

2017 年度から開始になる、新しい専門医制度に基づいた名古屋大学医学部附属病院
小児科研修医（専攻医）プログラム（第二部参照）では、卒後 5 年目に名大病院で 6
カ月間の研修を行うこととしている。

・ 研修方法：

Aグループ（血液・腫瘍）、Bグループ（神経、ウイルス、循環器）、Cグルー
プ（新生児）の各診療グループをローテーションする形式をとる。各グループの
ローテーションの期間は、研修病院における研修内容を考慮して決定する。また、
1ヶ月間、希望する病院における学外研修も行っている。希望者は、1ヶ月間
EMICU（救急・内科系集中治療室）での研修を行うことができる。

・ 学会発表：

研修期間中に、日本小児科学会東海地方会をはじめ、各分野の学会、研究会にて
研究発表、症例報告をおこなう。

・ 名大病院研修における主な教育関連行事：

① 新入院患者プレゼンテーション/教授回診

毎週木曜日の午後1時から病棟5階の教育スペースで、1週間の新入院患者の症例提
示をおこない、その後に5E病棟（小児内科病棟）の教授回診をおこなう。これら
を通じて、「症例提示の技術向上」と「各研修病院における治療の違いの標準化」

を行う。また、外国人留学生、外国人研修生が参加する場合は、英語による症例提示、討論をおこない、国際化に対応できる小児科医の育成を行っている。

② 医局抄読会

教員と大学院生が中心となり、**Science**、**Nature**、**Cell**に掲載されている論文の抄読会を1カ月に1回おこなっており、各分野のトピックスについての知識を深め、基礎研究への**exposure**を図る。

③ 入院患者症例検討会

教授回診に引き続き、臨床実習の医学部学生を交えて、隔週毎に小児科医局で行っている。入院患者の中から教育的な症例を取り上げて、1症例に1時間と十分な時間をかけて症例検討を行っている。臨床診断に至る過程や鑑別診断を重視したカンファレンスである。

④ 関連病院臨床研究

「関連病院臨床研究ワーキンググループ」が中心となり、日常診療で比較的良好に診る疾病を対象とした臨床研究を立ち上げている。研修期間中にワーキンググループに参加をして、臨床研究の企画、運営についての方法論を習得する。

⑤ 大学院研究発表会

大学院重点化後は大学院生が小児科医局の半数以上を占め、学外を含め研究活動を行っている。これら大学院生の研究の進行状況および各研究室間での情報交換を目的として、隔月毎に大学院研究報告会を行っている。大学院生は各自の研究の背景、方法論、研究過程について関連病院の医局員を含む公開の場で研究発表をおこなう。

⑥ 教員研究発表会

名古屋大学小児科には小児科各領域の専門家が教員として在籍している。各教員の研究内容を報告することで、医局員全体に各分野の研究の動向を紹介し、知識の共有をはかっている。

・ 各診療グループの診療の特徴について

<血液研究室>

再生不良性貧血や白血病／悪性リンパ腫といった血液疾患に加えて神経芽腫やウィルムス腫瘍などの小児がんが治療の中心で、2013年に全国で15病院が指定された「小児がん拠点病院」に、15病院中最高点で認定されている。常時60-65例が入院治療をうけており、集学的治療を目指し、化学療法や造血幹細胞移植をおこなっている。日本造血細胞移植学会の全国調査によれば、2015年の名大小児科における移植症例数は43例で、全国の小児科では第2位、大学病院では最多であった。また、日本小児血液がん学会の疾患登録において、2015年の名大小児科における悪性血液

疾患と固形腫瘍の新患数は51例で、全国で第6位、大学病院では最多であった。小児がん拠点病院の指定により、固形腫瘍の紹介症例が増えており、特に神経芽腫・脳腫瘍の新患は全国的にも上位である。これらの豊富な臨床例や全国から送付されてくる臨床検体を用いて、再生不良性貧血、骨髄異形成症候群、白血病、神経芽腫の免疫学的、あるいは遺伝子解析を中心に分子生物学的研究をおこなっている。また、名大病院が、「臨床研究中核病院」「革新的医療技術創出拠点」に指定されており、当研究室でもウイルス特異的細胞障害性T細胞やキメラ抗原受容体遺伝子導入T細胞(CAR-T細胞)療法といった新規免疫細胞療法の開発、臨床試験を行っている。2018年より「がんゲノム医療中核病院」に指定され、小児領域でのゲノム医療を一層進めている。

<ウイルス研究室>

難治性ウイルス疾患(慢性活動性EBウイルス感染症、亜急性硬化性全脳炎など)の治療と肝炎(特にウイルス性)に対する診断(肝生検)、治療(インターフェロン)を中心とした診療を行っている。また、様々なウイルス感染症の遺伝子診断を行っており、特に臓器移植患者(生体肝移植症例)、造血幹細胞移植患者に対するウイルスモニタリングシステムと早期治療システムは他施設にはない先端的医療である。

<神経研究室>

外来患者では難治てんかんの症例が圧倒的に多く、一般病院の患者層とは著しく異なっている。入院患者はWest症候群などのACTH療法や重症筋無力症、Guillain-Barre症候群などの診断、治療も行っている。また、市中病院では実施が難しい精密な神経生理学的検査を施行している。特に、発作時ビデオ脳波同時記録は年間100例程の実績がある。画像検査では、PET検査や3テスラMRIなど一般病院では施行が難しい検査を行って小児神経疾患の画像異常を評価している。臨床教育面では、小児脳波および新生児脳波が判読できるように指導をしている。毎週木曜朝に行っている画像カンファレンスは若手医師に好評で、神経画像の理解を深めるのに役立っている。毎月、第3火曜の夜には新生児グループと合同で新生児の頭部画像の検討を行っている。

<新生児研究室>

集学的周産期医療が必要な症例が多く、胎児診断がついている先天性横隔膜ヘルニアや胎児水腫などの症例を産科とともに胎児期から管理をしている。特に先天性横隔膜ヘルニアには力をいれており、国内ではトップレベルの症例数と治療成績である。また、早産児のみならず、小児外科症例、重症の未熟児網膜症症例など多彩な疾患を研修することができる。

<免疫研究室>

本研究室では詳細な免疫検査や遺伝子診断を行うことが可能である。自ら行うことにより、迅速に結果を得ることができ、外来患者、病棟患者の診断及び治療に役立

てている。また、本邦においての原発性免疫不全症の診断、治療、研究はパイオニア的存在であり、症例の集積は国内ではトップレベルである。臨床診断、遺伝子診断、治療と一貫して行える国内でも数少ない施設の1つである。

<循環器研究室>

主として先天性心疾患の診断やフォロー、他科の手術における周術期管理、胎児心エコー、成人先天性心疾患の診療などを行っている。先天性心疾患児の中には心疾患以外の合併症をもつ場合もあるため、他科や他施設との共同で効果的な医療を行うように努めている。また、特発性、肝疾患関連、新生児肺疾患関連の肺高血圧症には力を入れている。近年増加傾向にある成人先天性心疾患については小児科のみまたは循環器内科のみの診療では不足する点もあり、循環器内科、胸部外科と合同カンファレンスを行い、心臓カテーテル検査も合同で行って方針を決定している。

<EMICU>

院内の救急・内科系集中治療室の勤務体制に従って、交代勤務（日勤あるいは夜勤の2交代）に従事する。小児患者は年間約20-30例程度の入室があるが、成人患者の管理も求められる。この勤務は、認定施設への専従勤務歴として計算される。

- ・成人を中心とした集中管理を経験すること、
 - ・成人を対象として施行されている管理技術を習得すること、
 - ・成人を対象とした治療手技を小児に応用できるか考察すること、
 - ・小児患者に対して、治療の中心的役割を果たすこと、
- を目標とする。

- ・各診療グループの症例検討会、勉強会などのスケジュール

<血液研究室>

症例検討会：毎週火曜日（午後4時30分～）

研究カンファレンス：毎週火曜日（午後7時00分～）

血液標本検討会：毎週火曜日（午後15時30分～16時30分）

毎週木曜日（午前11時00分～12時00分）

抄読会：毎週火曜日（午前7時30分～）臨床的内容に関する文献について

毎週水曜日（午前7時30分～）基礎的内容に関する文献について

毎週木曜日（午前7時30分～）総説について

<ウイルス研究室>

症例検討会：毎週月曜日（午後6時00分～）

抄読会：毎週月曜日（午後7時00分～）

<神経研究室>

病棟カンファレンス：毎週月曜日（午後5時00分～）

抄読会：毎週月曜日（午後7時00分～）

新生児脳波検討：毎週月曜日（午後9時00分～）
新生児画像判読：毎月第3火曜日（午後7時00分～）
画像判読：毎週木曜日（午前8時00分～）
発作時脳波検討：毎週木曜日（午後2時30分～）
関連病院合同症例検討会：2ヵ月に1回（午後7時30分～）

<新生児研究室>

症例検討会：毎週月曜日（午後4時00分～）
周産期カンファレンス：毎週水曜日（午後5:00～）産科、小児外科と合同
MRIカンファレンス：第3火曜日（午後7時00分～）
抄読会：毎週月曜日（カンファレンス終了後）毎週水曜日（朝7時50分～）
死亡症例カンファレンス 適宜

<循環器研究室>

症例検討会・抄読会：毎週月曜日（午後5時00分～）

V. 経験すべき症候・疾患

研修中は、様々な疾病を偏りなく経験することが重要である。研修中に経験すべき症候・疾患については、日本小児科学会が発行している「小児科専門医 臨床研修手帳」の19～37頁に記載がある。小児科専門医試験に際して、「小児科専門医 臨床研修手帳」の提出が義務づけられるため、「小児科専門医 臨床研修手帳」を利用して、経験した症候・疾患を記録しておくことが必要である。

VI. 研修の自己評価、指導医評価

臨床研修では、自己評価を行うことが必要である。同時に指導医評価を行うことで、研修内容の見直しが行われる。研修の自己評価、指導医評価についても日本小児科学会が発行している「小児科専門医 臨床研修手帳」の8～9頁、12～17頁に記載があるため、それを利用することとする。

新しい専門医制度における、名大病院小児科研修医（専攻医）プログラムにおいての研修の評価については第二部に記載されている。「小児科専門医 臨床研修手帳」は、小児科研修を開始する際に、各施設の責任者から配布してもらうこと。

VII. 専門医取得プログラム

小児科の専門医制度には、小児科専門医のほかに小児科各分野に専門医制度が存在する。小児科初期研修の目的のひとつに、小児科専門医を取得後にサブスペシャリティーを育成することがあげられる。本学小児科での研修プログラムに、各専門分野における専門医制度に関する情報を提供するので、各分野の専門医取得に利用していただきたい。

① 小児科専門医制度

名 称：小児科専門医

専門医認定学会：日本小児科学会 (<http://www.jpeds.or.jp/>)

概 要：日本小児科学会が認定する。従来の認定制度より、2002年に小児科専門医制度を新たに施行した。小児科専門医は小児保健を包括する小児医療に関してすぐれた医師を育成することにより、小児医療の水準向上進歩発展を図り、小児の健康の増進および福祉の充実に寄与することを目的とし、所定の卒後研修を終了した会員に対し、試験を実施し、資格を認めている。資格は5年ごとに審査のうえ更新される。

なお、2017年度より、研修プログラムの評価・認定、研修施設の評価・認定、小児科専門医の認定については、学会ではなく中立的第三者機関である日本専門医機構が行うことになった（新制度）。そのため、2015年以降に初期研修を開始した医師が小児科専門医を取得するためには、基幹施設が提供するプログラム制による小児科の後期研修を原則3年間行う必要がある。名大病院小児科研修医（専攻医）プログラムについては第二部を参照頂きたい。以下に記載されている専門医の受験要件は旧制度対象者（2014年以前に初期研修を開始した医師）であり、新制度での受験要件とは異なる可能性がある。

必要条件：

- A) 試験当日に学会会員であり、学会会員歴が引き続き3年以上、もしくは通算して5年以上であるもの。
- B) 2年間の卒後臨床研修を受け、その後さらに小児科専門医制度規則第15条に規定する小児科臨床研修を3年以上受けたもの。もしくは小児科臨床研修を5年以上受けたもの。

2009年以降の医師国家試験合格者の受験資格には、下記も必要である。

(http://www.jpeds.or.jp/modules/specialist/index.php?content_id=3)

- 1) 学会会員歴が引き続き3年以上、もしくは通算して5年以上であるもの。
- 2) 2年間の卒後初期臨床研修を修了後、学会の指定した専門医研修施設（専門医研修関連施設を含む）において3年以上の研修を修了、または研修修了見込みであるもの。ただし、専門医研修期間のうち延べ6か月以上を研修支援施設で研修すること。

また、2017年以降の専門医試験においては下記も必要となる。

(http://www.jpeds.or.jp/modules/specialist/index.php?content_id=29)

- (1) 論文執筆経験を受験の必須項目として義務化する。なお、指定の雑誌に掲載されたもので受験者が筆頭著者となっている論文のみとする。
- (2) 症例要約に指定疾患を含むことを義務化する。なお、各疾病分野に指定疾患を最低1例含む必要がある。

新制度の概要を以下に示す。基幹施設ごとに研修プログラムが提供されており、詳細については各研修プログラムを参照していただきたい。

a) 名大関連での小児科専門医研修施設

・基幹施設

名古屋大学医学部附属病院、岡崎市民病院、公立陶生病院、名古屋第一赤十字病院、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、あいち小児保健医療総合センター、名古屋記念病院、

・名古屋大学連携施設

愛知医科大学病院、愛知県厚生農業協同組合連合会豊田厚生病院、愛知県厚生農業協同組合連合会江南厚生病院、愛知県医療療育総合センター中央病院、あま市民病院、稲沢市民病院、大垣市民病院、春日井市民病院、公立西知多総合病院、国立病院機構名古屋医療センター、国家公務員共済組合連合会名城病院、総合上飯田第一病院、総合大雄会病院、地域医療機能推進機構中京病院、地域医療機能推進機構可児とうのう病院、中東遠総合医療センター、津島市民病院、西知多総合病院、常滑市民病院、トヨタ記念病院、中津川市民病院、名古屋掖済会病院、名古屋通信病院、半田市立半田病院、碧南市民病院、名鉄病院、労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院

b) 小児科専門医を取得するための過程や取得時期：

小児科研修プログラムは3年間であり、基幹施設での研修を6ヶ月以上含む必要がある。

c) 小児科専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

「小児科専門医研修開始の決定後は」あるいは「各専門研修プログラム採用決定後は」、早期に日本小児科学会に所属し研修を開始する。詳細は小児科学会のホームページ (<https://www.jpeds.or.jp/>) を参照のこと。

② 小児科各分野関連の専門医（認定医）制度について

以下の各項目を各分野の専門医制度につき詳述する。最新の情報については記載してある学会ホームページを参照されたい。

専門医（認定医）の名称、認定学会、取得必要条件

a) 専門研修認定施設に必要な専門医（認定医）

b) 名大関連での専門医（認定医）認定施設と専門医（認定医）・指導医の人数

c) 名大関連病院ごとの特徴（*この際の名大関連とは、関係する研修可能な施設を含む）

- d) 各分野専門医（認定医）を取得するための過程や取得時期
- e) 各分野専門医（認定医）を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

<日本血液学会>

名称：血液専門医

専門医認定学会：日本血液学会 (<http://www.jshem.or.jp/index.html>)

必要条件：

- ・小児科認定医取得
- ・日本血液学会の認定施設で臨床血液学の研修を3年
- ・日本血液学会の会員歴3年
- ・臨床血液学に関する学会発表または論文が2つ以上
- ・受け持ち入院患者のうち15名の診療実績記録の提出。症例は3領域（赤血球疾患、白血球疾患、出血血栓性疾患）のそれぞれにおいて少なくとも2例を含む

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

- ・認定施設のための専門医の人数の規定はない
- ・認定施設として毎年書類審査あり

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・専門医認定施設：（日本血液学会認定の名大小児科関連病院）

名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センター、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、岡崎市民病院、名鉄病院、名古屋記念病院、愛知県厚生農業組合連合会江南厚生病院、常滑市民病院、地域医療機能推進機構中京病院、トヨタ記念病院、名古屋掖済会病院

- ・血液専門医：

名古屋大学医学部附属病院 小児科	高橋義行	村松秀城
	西尾信博	成田 敦
	西川英里	川島 希
	濱田太立	谷口理恵子
	北澤宏展	三輪田俊介
	若松 学	
国立病院機構名古屋医療センター 小児科	堀部敬三	前田尚子
	関水匡大	秋田直洋
名古屋第一赤十字病院 小児科	濱 麻人	吉田奈央
	土居崎小夜子	北澤宏展
	坂口大俊	

- | | |
|------------------------|-------|
| 愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院 小児科 | 宮島雄二 |
| 名鉄病院 小児科 | 渡邊修大 |
| 岡崎市民病院 小児科 | 近藤 勝 |
| 愛知県厚生農業組合連合会江南厚生病院 | 鈴木 喬悟 |
- ・血液指導医：
- | | |
|----------------------|-------------|
| 名古屋大学医学部附属病院 小児科 | 高橋義行 西尾信博 |
| | 村松秀城 成田敦 |
| 国立病院機構名古屋医療センター 小児科 | 堀部敬三 前田尚子 |
| | 関水匡大 秋田直洋 |
| 名古屋第一赤十字病院 小児科 | 濱 麻人 吉田奈央 |
| | 坂口大俊 土居崎小夜子 |
| 岡崎市民病院 小児科 | 近藤 勝 |
| 愛知県厚生農業協同組合連合会安城更生病院 | 宮島雄二 |

<日本造血細胞移植学会>

名称：造血細胞移植認定医

専門医認定学会：日本造血細胞移植学会 (<http://www.jshct.com/index.shtml>)

必要条件：

- ・日本血液学会血液専門医、または日本小児血液・がん専門医取得
- ・日本造血細胞移植学会の会員歴3年
- ・日本造血細胞移植学会学術総会参加3回以上
- ・教育セミナー10単位以上
- ・非血縁者間造血細胞移植認定施設において、造血細胞移植に関する内科または小児科研修による通算1年以上の診療実績
- ・骨髓採取実績3例以上
- ・同種造血細胞移植の診療実績記録5例以上を提出
- ・造血細胞移植臨床に関する学術業績として、①造血細胞移植の臨床に関する筆頭著者論文（和文・英文は問わない）1つ以上、②造血細胞移植に関する学会発表3回以上（筆頭演者1回以上を含む）を有する

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・造血細胞移植認定医：

- | | |
|---------------------|----------------|
| 名古屋大学医学部附属病院 小児科 | 高橋義行 西尾信博 |
| | 村松秀城 成田 敦 川島 希 |
| 名古屋第一赤十字病院 小児科 | 濱 麻人 吉田奈央 坂口大俊 |
| 国立病院機構名古屋医療センター 小児科 | 堀部敬三 前田尚子 |

<日本小児血液・がん学会>

名称：小児血液・がん専門医

専門医認定学会：日本小児血液・がん学会 (<http://www.jspho.jp/>)

必要条件：

<http://www.jspho.jp/specialist/>

- ・小児科認定医取得
- ・日本がん治療認定医機構がん治療認定医、または日本血液学会血液専門医取得
- ・日本小児血液・がん学会の会員歴3年
- ・卒後初期研修終了後5年以上小児血液および小児がんを含む小児科臨床に携わっていること。
- ・24か月以上日本小児血液・がん学会の専門医研修施設に所属し、定められた研修カリキュラムを終了していること。

a) 専門医研修施設認定に必要な専門医：

小児血液・がん指導医（暫定指導医を含む）1名以上が常勤で勤務していること。

b) 名大関連での専門医研修施設と専門医・指導医の人数

- ・小児血液・がん専門医研修施設：(日本小児血液・がん学会認定の名大小児科関連病院)
名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センター、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院

・小児血液・がん専門医：

名古屋大学医学部附属病院 小児科	西尾信博 村松秀城
	成田 敦 川島 希
愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院 小児科	宮島雄二
愛知県厚生農業組合連合会江南厚生病院	鈴木 喬悟
名古屋第一赤十字病院 小児科	濱 麻人 吉田奈央
	土居崎小夜子 坂口大俊
国立病院機構名古屋医療センター 小児科	前田尚子 関水匡大
	服部浩佳

・小児血液・がん指導医（*：暫定指導医）：

名古屋大学医学部附属病院 小児科	高橋義行*、村松秀城
国立病院機構名古屋医療センター 小児科	前田尚子、堀部敬三*
名古屋第一赤十字病院 小児科	濱 麻人
愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院 小児科	宮島雄二

c) 名大関連病院ごとの特徴

- ・名古屋大学医学部附属病院：再生不良性貧血・神経芽腫を中心として、広範な難治性の血液・腫瘍疾患をカバーする。症例も多数。幹細胞移植症例数：25例（2005年）。全国大学附属病院の小児科の中では最も多い。再生不良性貧血治療研究会の全国事務局。単一施設での小児再生不良性貧血の治療症例数は世界有数。血液・腫瘍に関する臨床から基礎的研究まで施行。ヒトへの細胞治療を可能にするGMP基準に合致したセルプロセッシングセンターを併設。
- ・名古屋第一赤十字病院：各種白血病、造血不全症等の症例が非常に豊富。広範な血液・腫瘍疾患に対応。造血細胞移植の累積症例数は700例を超え、小児科では全国2番目に多い。施設独自の方針を基に低リスク群では晩期障害の予防、高リスク群では非再発死亡の低減に取り組んでいる。先天性代謝異常症等の非腫瘍性疾患の造血細胞移植症例数も国内有数。平成25年度には厚生労働省から造血幹細胞移植拠点病院の1つに認定され、小児造血細胞移植領域の教育研修に努めている。
- ・国立病院機構名古屋医療センター：厚生労働省が指定する血液・造血管器疾患分野の高度専門医療施設であり、小児科においても白血病・リンパ腫など造血管器腫瘍、骨軟部腫瘍・網膜芽細胞腫など固形腫瘍を中心に、広範な血液・腫瘍疾患の症例が多数あり。附属の臨床研究センターには、日本小児がん研究グループ(JCCG)血液腫瘍分科会(JPLSG)のデータセンターと遺伝子解析センターがあり、全国から小児造血管器腫瘍のデータが登録集計されるとともに白血病リンパ腫の中央検査が行われている。
- ・愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、岡崎市民病院、名鉄病院：症例数は上記3病院と比較して少ない。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

- ・小児科専門医取得および3年以上の日本血液学会認定施設での研修が必要。臨床では研究的な考え方も必要であるため、大学院入学を勧めている。大学院在学中に小児科専門医の資格を取得していれば、最短で大学院修了時に血液専門医の受験資格を得ることも可能である。
- ・大学院コース：最初の半年～1年間は大学で臨床研修を行い、残りの期間は診療フリーで研究に専念する。従来型のコース。
- ・社会人大学院コース：大学（身分は医員に準ずる）あるいは関連施設（名古屋第一赤十字病院、国立病院機構名古屋医療センターなど）で、血液学の分野で3年以上の臨床経験を積み、さらに6ヶ月から1年の研究期間で業績をまとめ、学位を取得して専門医試験を受験するコース。

なお、大学院終了後、専門医を取得した後は海外留学、血液専門施設への就職、教員への任用、等の道が開かれている。

<日本アレルギー学会> (<http://www.jsaweb.jp>)

名称：社団法人日本アレルギー学会認定「アレルギー専門医」

専門医認定学会：社団法人日本アレルギー学会 (<http://www.jsaweb.jp/>)

必要条件：

- ・認定時に引き続き 5 年以上この法人の会員であること
- ・小児科学会の専門医資格の認定を受けていること
- ・通算 6 年以上の臨床研修歴を要する。その内通算 3 年以上は日本アレルギー学会認定教育施設等における臨床研修を要する。ただし、教育施設での研修が困難な場合は、別途規定の研修方法により所定の臨床研修を受ける
- ・最近の 5 年間に自ら診療しているアレルギー疾患患者 40 名分の診療実績書と内 2 例の症例報告書の提出
- ・最近の 5 年間にアレルギー学の業績が 50 単位以上あること。ただし、日本アレルギー学会秋季学術大会および春季臨床大会への出席 3 回以上を含めるものとする。
- ・「専門医」資格認定試験に合格していること

(教育施設以外での研修計画)

(1)集中研修を 1 回受講する。

(2)教育セミナーを 3 回受講する(春・夏それぞれ 1 回以上受講する)。

(3)「指導医」または「専門医」の外来見学実習(診療所も可)を 10 時間以上受講する。

(教育施設と教育施設以外での研修の組合せ)

(1)「教育施設」での研修歴が 2 年以上 3 年未満の場合は前条の(1)又は(2)を受講する。

(2)「教育施設」での研修歴が 1 年以上 2 年未満の場合は前条の(1)~(3)のうち 2 つを受講する。

(3)「教育施設」での研修歴が 1 年未満の場合は前条の(1)~(3)を受講する。

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

指導医 1 名以上または専門医 2 名以上（非常勤 1 名を含む）が勤務していること

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・関連病院における専門医認定施設：

あいち小児保健医療総合センター、労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院

国立病院機構名古屋医療センター、名古屋掖済会病院

公立陶生病院、春日井市民病院（教育施設）

・指導医：

あいち小児保健医療総合センター

伊藤浩明

労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院 小児科	山田政功*
国立病院機構名古屋医療センター 小児科	二村昌樹

・専門医：

あいち小児保健医療総合センター	松井照明
碧南市民病院 小児科	土井 悟
公立陶生病院 小児科	森下雅史、中田如音*
豊田厚生病院 小児科	武田将典、中西久美子*
トヨタ記念病院 小児科	大島美穂子*
名古屋掖済会病院 小児科	木村量子*
春日井市民病院 小児科	小林貴江、田上和憲
岡崎市民病院 小児科	渡邊由香利、花田優
名古屋記念病院 小児科	佐藤有沙*
愛知医科大学病院 小児科	武藤太一郎、田中賀治代*

*非常勤医師

c) 名大関連病院ごとの特徴

・あいち小児保健医療総合センター アレルギー科

アレルギーに専門特化した診療と臨床研究を行っており、全国から多数のフェローが研修に集まっている。食物アレルギーの経口負荷試験（1200 件/年）や経口免疫療法など、全国有数の症例数をもつ。藤田医科大学、名古屋学芸大学管理栄養学部などと連携し、基礎的な研究も経験可能。学会発表（国際学会含む）年間 20 件以上、論文（英文含む）作成も指導する。

・国立病院機構名古屋医療センター 小児科

国立病院機構のネットワークを活かした全国規模の臨床研究が可能である。附属の臨床研究センターには生物統計をはじめ臨床研究のプロが複数所属しており、立案・実施・解析まできめ細かく指導する。また科研費の獲得に関しても指導を行う。

・名古屋掖済会病院 小児科

常勤+非常勤の専門医が在籍して教育施設認定を取得した。救急の受け入れが多く、経口負荷試験なども実施数を増やしつつある。

・公立陶生病院 小児科

専門医 2 名が在籍し、教育施設として認定されている。

・愛知医科大学病院 小児科

指導医 1 名の常勤と専門医 3 名の非常勤が在籍している。入院・外来での食物アレルギー経口負荷試験、食物+運動負荷試験を日常診療で行い、食物アレルギーの基礎研究も行っている。

- ・労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院 小児科
現在は非常勤医師のみで外来中心に診療をしている。
- ・春日井市民病院 小児科
専門医 2 名が在籍し、アレルギー学会教育施設に認定されている。アレルギー外来以外に、日帰り入院による食物負荷試験、運動誘発負荷試験なども行っている。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

小児科後期研修を修了した後、アレルギー教育施設で 3 年間（3 年未満の場合はその他の研修で補完）の臨床研修を行う。

e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

名古屋大学の後期研修制度を修了した後、あいち小児保健医療総合センター、又は名古屋医療センターでフェローとして約 2 年間の専門研修を行う。それと前後して、関連病院でアレルギー外来などの臨床経験を積む経験も重要である。

<日本感染症学会>

名称：日本感染症学会専門医

専門医認定学会：日本感染症学会 (<http://www.kansensho.or.jp>)

必要条件：

- ・小児科専門医、日本感染症学会の会員歴 5 年
- ・感染症学の研修歴が 6 年以上であり、その内、3 年間は学会が指定した研修施設で研修を行っていること。
- ・感染症の臨床に関して筆頭者としての論文発表 1 篇、学会発表 2 篇、計 3 篇
- ・認定試験あり

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：日本感染症学会指導医が 1 名以上

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・専門医認定研修施設：

名古屋大学附属病院

あいち小児医療保健総合センター

江南厚生病院

地域医療機能推進機構中京病院

・専門医：

一宮市立市民病院 小児科

成瀬 宏

名古屋大学大学院 ウイルス学

木村 宏

あいち小児医療保健総合センター 感染症科	河邊慎司
江南厚生病院 こども医療センター	後藤研誠 武内 俊
名古屋大学大学院小児科学 小児科	川田潤一

・指導医

江南厚生病院 こども医療センター	尾崎隆男 西村直子
地域医療機能推進機構中京病院 小児科	柴田元博
名古屋大学大学院小児科学 小児科	伊藤嘉規
名古屋記念病院 小児科	鈴木道雄

<日本小児神経学会>

名称：小児神経専門医

専門医認定学会：日本小児神経学会 (<https://www.childneuro.jp>)

専門医試験の受験資格（抜粋）：

- ・ 日本小児科学会が認定する小児科専門医または日本リハビリテーション医学会が認定するリハビリテーション科専門医の資格を有する。
- ・ 小児神経専門医研修施設あるいは研修関連施設において 5 年間の所定の研修を修了している。
- ・ 現在小児神経疾患の診療に従事し、5 年以上学会の会員歴を有する。
- ・ 小児神経疾患患者 30 例の症例要約と、その症例詳細報告 5 例を提出する。
- ・ 研修施設指導責任医、または小児神経専門医資格を有する本学会評議員の推薦状
- ・ 日本専門医認定制機構に加盟している基本領域の学会の専門医（認定医）資格
- ・ 最近 5 年間に研修単位が 50 単位以上。さらに本学会総会、小児神経学セミナーまたは学会が認めた地方会に出席した合計が 20 単位以上（但し、本学会総会出席が 1 回以上）。総会および地方会、関連学会に演者として 2 回以上発表し、小児神経学に関する論文（筆頭）を執筆。

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

小児神経臨床研修の指導責任者が定められ、指導責任医は常勤ないしそれに準ずる勤務実態を有する。

b) 名大関連病院での専門医認定施設と専門医の人数

・小児神経専門医研修認定施設

名古屋大学医学部附属病院、あいち小児保健医療総合センター、
愛知県医療療育総合センター中央病院、
安城更生病院、岡崎市民病院、愛知医科大学

・研修認定施設の関連施設

愛知県青い鳥医療療育センター、愛知県医療療育総合センター中央病院こぼと棟(旧愛知県心身障害者コロニーこぼと学園)、名古屋第一赤十字病院、豊田市こども発達センター

・名古屋大学関連病院における専門医 (2019年2月1日)

名古屋大学医学部附属病院	夏目 淳	城所博之
	中田智彦	
愛知県医療療育総合センター中央病院	三浦清邦	丸山幸一
	山田桂太郎	倉橋直子
	小川千香子	
愛知医科大学病院 小児科	奥村彰久	倉橋宏和
あいち小児保健医療総合センター	糸見和也	鈴木基正
青い鳥医療療育センター	菱川容子	安井 泉
	平岩文子	横井摂理
三河青い鳥医療療育センター	伊藤祐史	
名古屋第一赤十字病院	竹内智哉	
安城更生病院	久保田哲夫	深沢達也
岡崎市民病院	早川文雄	加藤 徹
	辻 健史	
岡崎市こども発達センター	中村みほ	
豊田厚生病院 小児科	梶田光春	

c) 名大関連病院ごとの特徴

- ・岡崎市民病院：急性脳症やけいれん重積などの急性期疾患も、脳性麻痺・てんかんなどの慢性疾患も多い。新生児脳波を始めとする新生児神経学に力を入れて臨床・研究を行っているほか、サイトカインと中枢神経疾患との関連や、神経画像についても臨床・研究で実績がある。岡崎市こども発達センターと連携し発達障害について学ぶこともできる。
- ・安城更生病院：新生児神経学の研究がさかんである。急性脳症やけいれん重積などの急性期疾患も、脳性麻痺・てんかんなどの慢性疾患も多い。てんかんや神経画像の分野でも実績が多い。
- ・名古屋第一赤十字病院：急性脳症やけいれん重積などの急性期疾患も、脳性麻痺・てんかんなどの慢性疾患も多い。NICUを持つため新生児脳波の記録も多い
- ・愛知県医療療育総合センター中央病院：重度の障害児が多く、障害児の包括的ケア

- を研修するのに向く。また、関連病院の中で筋疾患の研修ができる唯一の病院である。また、先天異常児も多く、遺伝性疾患についての研修も可能である。研究面では愛知県医療療育総合センター発達障害研究所との共同研究ができる可能性がある。
- ・あいち小児保健医療総合センター：先天異常からてんかんまで多くの症例が集まっている。
 - ・青い鳥医療療育センター：療育施設として障害児医療を経験、理解する機会になる。障害児の嚥下機能評価などに力を入れている。
 - ・三河青い鳥医療療育センター：療育施設として障害児医療を経験、理解する機会になる。障害児の歩行解析などに力を入れている。
 - ・豊田市こども発達センター：2012年から名古屋大学小児科の関連施設になった。児童精神科が充実しており、障害児医療とあわせて発達障害の診療について研修できる。
 - ・愛知医科大学病院：てんかんセンターを立ち上げ、てんかんの包括的診療を行っている。また、救急医療に力を入れており、けいれん重積や急性脳症の実績もある。それ以外にも多様な小児神経疾患の研修が可能である。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

初期研修病院での研修内容にもよるが、小児科専門医を取得後2～3年程度は名古屋大学医学部附属病院か、上記の研修施設でのトレーニングが必要と思われる。専門医としての知識、技能を身につけるには、急性疾患、慢性疾患、新生児神経学、障害児医療などを偏りなく診療できることが望まれるため、2～3カ所の研修施設で診療に従事するのが理想であろう。

e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

- ・大学院に進学する場合：最低1年は名古屋大学医学部附属病院での臨床業務に従事する。代務で神経外来を継続的に担当する。小児神経疾患の遺伝学的または画像・神経生理学的研究を行い、在学中に小児神経に関する臨床研究論文も執筆する。
- ・大学院に進学しない場合：上記の研修施設で2～3年研修するか、名古屋大学医学部附属病院で医員として臨床業務を行う

<日本周産期・新生児医学会>

名称：周産期新生児専門医

専門医認定学会：日本周産期・新生児医学会

(<https://www.jspnm.com/Senmoni/seido.aspx>)

必要条件：

- ・日本小児科学会専門医
- ・日本周産期・新生児医学会会員歴が3年以上

- ・認定研修施設における3年間の研修（6カ月は指定された基幹病院での研修が必須）
- ・学会が認める周産期医学，周産期医療に関連する原著論文1編以上を筆頭著者として査読制度のある雑誌に発表していること。
- ・学会が認める周産期医学関連学会に所定の回数，参加し，かつ筆頭演者として発表を行っていること。
- ・筆記試験、面接試験あり

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

- ・1名以上の指導医が必要

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・指導医は日本周産期・新生児医学会の専門医委員会が選考した暫定指導医である。
- ・研修認定施設：

基幹施設：名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター、
 名古屋第一赤十字病院総合周産期母子医療センター
 愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院総合周産期母子医療センター
 大垣市民病院第二小児科（小児循環器・新生児科）

指定施設：公立陶生病院小児科、トヨタ記念病院周産期母子医療センター、
 岡崎市民病院小児科、江南厚生病院こども医療センター

補完施設：半田市立半田病院小児科

・専門医

名古屋大学医学部附属病院	早川昌弘	佐藤義朗	齊藤明子
	北瀬悠磨	鈴木俊彦	棚橋義浩
	三浦良介	呉尚治	新井紗記子
名古屋第一赤十字病院	大城 誠	安田彩子	中山 淳
愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院	加藤有一	久保田哲夫	服部哲夫
	杉山裕一郎	兵藤玲奈	片岡英里奈
江南厚生病院	竹本康二		
公立陶生病院	家田訓子	加藤英子	
トヨタ記念病院	山本ひかる	田中龍一	
岡崎市民病院	松沢 要		
大垣市民病院	立花貴史	前田剛志	
中部ろうさい病院	安田彩子		

・代表指導医および暫定指導医：

名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター	早川昌弘
名古屋第一赤十字病院 総合周産期母子医療センター	大城 誠
愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院 新生児科	加藤有一
大垣市民病院 第二小児科（小児循環器・新生児科）	立花貴史
公立陶生病院 小児科	家田訓子
トヨタ記念病院 周産期母子医療センター	山本ひかる
岡崎市民病院 新生児小児科	林 誠司
江南厚生病院 こども医療センター	竹本康二

c) 名大関連病院ごとの特徴

- ・**名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター**：総合周産期母子医療センターとして、集学的周産期医療を行っている。胎児診断された新生児外科疾患症例が豊富であり、特に先天性横隔膜ヘルニア症例は国内でトップレベルの症例数と成績である。一酸化窒素吸入療法、体外式膜型人工肺、低体温療法、血液透析等の高度医療に対応しており、三次救命の研修が可能である。また、関連施設のまとめ役的存在であり、関連施設からのデータ管理、分析なども行っている。2020年3月現在、新生児仮死による低酸素性虚血性脳症患者を対象としたMuse細胞投与の医師主導治験を行っている。また、ウイルスGと協働し、先天性サイトメガロウイルス感染症に対するバルガンシクロビル投与の治験を行っている。
- ・**名古屋第一赤十字病院総合周産期母子医療センター**：年間の入院数は約 600 名で、極低出生体重児の入院数は約 100 名に及ぶ。NO 吸入・低体温療法や新生児外科・脳神経外科手術に対応可能である。小児科専門研修医は新生児専任医師と共に当直を行い、昼夜を問わずに指導を受けることができる。
- ・**愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院総合周産期母子医療センター**：年間 700 例の入院、200 例以上の新生児搬送を行うなど、西三河周産期医療の中心的役割を果たしている。特に神経領域や超早産症例が豊富であることから、充実した新生児医療研修が可能である。
- ・**大垣市民病院**：岐阜県西濃地域唯一の NICU であり、新生児搬送も広域をカバーし、積極的に行っている。早産児は在胎 22 週から対応し、NO 吸入療法や脳低温療法など重症成熟児にも対応できる。小児循環器科の管理で先天性心疾患の管理も行っている。専門医や上級医の指導の下、充実した新生児研修を目指している。
- ・**トヨタ記念病院**：西三河北部医療圏の地域周産期母子医療センターとして認定され、NICU6 床、GCU12 床を有している。超低出生体重児を含むハイリスク新生児に対応し、院外出生児の迎え搬送にも対応している。将来、若手医師が苦手意識を持つことなく新生児診療を行えるよう、重症例の診療にも上級医の指導の下で積極的に

関わる事が可能である。

- ・ **公立陶生病院**：愛知県地域周産期母子医療センターに指定されている。超低出生体重児を含む低出生体重児や人工呼吸管理等を必要とするハイリスク新生児の診療を行っている。尾張東部医療圏のみならず、岐阜県東濃地区からの新生児搬送や母体搬送にも対応している。
- ・ **江南厚生病院**：江南厚生病院こども医療センターは、こども病棟 51 床、NICU6 床、GCU12 床からなる。若手医師に充実した新生児分野の研修の場を提供するとともに、地域周産期母子医療センターとしての機能向上を目指している。
- ・ **岡崎市民病院**：当病院の NICU は地域周産期センターで、NICU 加算 6 床、GCU17 床の 23 床からなる。早産児は 22 週から対応しており、低体温療法、NO 吸入療法も可能である。各施設からの医師のサポートもあり、腸管穿孔に対する手術、動脈管結紮術も NICU 内で行っている。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

- ・ 研修期間は 3 年間
- ・ 基幹研修施設または指定研修施設・補完研修施設で研修となる。
- ・ 3 年間の研修期間のうち、6 ヶ月は基幹病院（名古屋大学医学部附属病院・名古屋第一赤十字病院・愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院・大垣市民病院）での研修が義務付けられている。

e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

- ・ 小児科初期研修終了後（小児科専門医取得後）に、研修可能な施設に勤務をして、専門医研修を開始する。研修中、最低 6 カ月は基幹病院へ赴任することとする。
- ・ 効率的な研修ができるように、施設間における研修内容の違いを極力少なくする努力を行っている。

<日本小児循環器学会>

名称：日本小児循環器専門医

専門医認定学会：日本小児循環器学会 (<http://jspccs.umin.ac.jp/>)

必要条件：

- ・ 日本国医師免許を有すること。
- ・ 小児循環器専門医は小児科専門医であること。他の基本領域の専門医については、専門医・修練施設等認定委員会で審査する。
- ・ 受験申込時、5 年以上継続して本学会会員であり、会費を完納していること。
- ・ 小児循環器専門医は、卒後 8 年以上の研修および修練期間を有し、本学会が認定する修練施設または修練施設群で 5 年間の小児循環器修練を修了していること。ただ

し、本学会が認定する修練施設における小児科専門医修練については、2年間に限り小児循環器修練期間に算入できる。

- ・ 下に示す臨床経験を持っていること。
- ・ 所定の学術研究業績を有すること。
- ・ 本学会が認める小児循環器関連学会に所定の回数参加し、かつ筆頭演者として発表を行っていること。
- ・ 本学会の行う資格認定試験に合格していること。

*小児循環器専門医の申請に必要な修練内容は以下の通り。

- 1) 入院患者の受け持ちを30例以上経験していること。
- 2) 心臓カテーテル検査を30例以上実施していること。
- 3) 運動負荷検査を5例以上、ホルター心電図読影を5例以上、心エコー検査を100例以上実施していること。
- 4) 心臓検診への参加や、要精検者への対応などの実績があること。
- 5) 小児循環器に関係する論文を1編以上、筆頭著者として刊行していること。
- 6) 日本小児循環器学会認定の、学会、研究会、分科会、地方会に、小児循環器に関係する発表を、筆頭演者として3回以上行っていること。
- 7) 日本小児循環器学会学術集会へ3回以上出席していること。
- 8) 研修施設内外を問わないが、安全管理に関する会議、講習会へ3回以上出席していること。

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

1名以上の小児循環器専門医が必要。その他施設基準あり。

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

修練施設および修練施設群

地域医療機能推進機構中京病院（中京こどもハートセンター）	小児循環器科
あいち小児保健医療総合センター	循環器科
大垣市民病院	小児循環器新生児科
名古屋大学医学部附属病院	小児科
名古屋第一赤十字病院	小児科
岡崎市民病院	小児科
名城病院	小児科・小児循環器科

小児循環器専門医

地域医療機能推進機構中京病院（中京こどもハートセンター）小児循環器科

大橋直樹 西川 浩

		吉田修一郎 今井祐喜
		武田 紹(非常勤)
名古屋第一赤十字病院	小児科	福見大地、三井さやか
国立病院機構名古屋医療センター	小児科	後藤雅彦
大垣市民病院	小児循環器新生児科	倉石建治 西原栄起
名古屋大学医学部附属病院	小児科	加藤太一 山本英範
岡崎市民病院	小児科	長井典子
		瀧本洋一 (非常勤)
名城病院	小児科・小児循環器科	小川貴久 小島奈美子
あいち小児保健医療総合センター	循環器科	安田和志 鬼頭真知子
		郷 清貴
半田市立半田病院	小児科	篠原 修
中東遠総合医療センター	小児科	早野 聡

c) 名大関連病院ごとの特徴

名古屋大学医学部附属病院小児科

主として先天性心疾患の診断やフォロー、他科の手術における周術期管理、胎児心エコー、成人先天性心疾患の診療などを行っている。先天性心疾患児の中には心疾患以外の合併症をもつ場合もあるため、他科や他施設との共同で効果的な医療を行うように努めている。また、特発性や、肝疾患関連、新生児肺疾患関連を含めた肺高血圧症には力を入れている。近年増加傾向にある成人先天性心疾患については小児科のみまたは循環器内科のみの診療では不足する点もあり、循環器内科、胸部外科と合同カンファレンスを行い、心臓カテーテル検査も合同で行って方針を決定している。

地域医療機能推進機構中京病院小児循環器科: 中京こどもハートセンターを立ち上げて6年目となりました。先天性心疾患のオペ件数は231→236→242→243→240例と依然250例の壁が超えられません。医師不足ならぬナース不足が大問題ですが、心臓外科医の技術は「天井知らず」に向上し、完全大血管転位は生後3週で合併症なく退院し、左心低形成症候群のノーウッド手術もこの10年で累積49例に達し、耐術例は44例で成功率は89.8%と、全国トップレベルの実績を挙げています。一方で、手術前の待機入院や急性期後の入院を鈴木一孝医師を中心とする名市大病院や福見大地医師を中心とする中村日赤にバックアップ&サポートして頂き、心外科医の小坂井医師を中心とする八事日赤では当院の心外科医が出向いて手術も執刀しています。まさに「中京こどもハートセンター」のチームワーク医療連携です。

あいち小児保健医療総合センター循環器科：東海三県で唯一の小児医療専門施設である。全国で6番目に認定された小児専門ICUを有する。2016年2月にはヘリポートを備えた救急棟が開設され、東海三県初の小児救命救急センターとして本格的に活動を開始し、手術室も増設された。また2016年11月からは周産期センターも新設され、胎児・新生児から小児・青年患者まであらゆる循環器疾患に対応可能な診療体制が確立した。心臓外科、新生児科、集中治療科、救急科、その他の内科系専門科および外科系専門科と協力しながら小児に特化した高度な診療を行うことが可能である。2017年の診療実績は、心臓カテーテル検査282件（うち治療85件）、心臓外科手術197件（うち開心術165件）であった。近隣施設との合同カンファレンスも定期的に行い、綿密に連携した質の高い医療を展開している。

名古屋第一赤十字病院小児循環器科：専門医2名を含む3名で診療を行っています。胎児エコー（10-15例/年）、院内出生児全員の心臓超音波検査（1500例/年）心臓カテーテル検査/治療（20例/年）のほか、非侵襲的検査（MRI CT、シンチ、運動生理検査やMICS手術（小さい傷口での開胸手術 特に心房中隔欠損症）にも力を入れています。2017年より成人先天性心疾患外来も開設しました。

大垣市民病院第二小児科(小児循環器新生児科)：大垣市民病院は、総病床数903の岐阜県西濃地域の基幹病院です。そのため、小児/成人心臓血管外科、成人循環器科、新生児科、脳神経外科、救命救急センターなどおよそ全ての診療科が揃い、急性から慢性まで全ての心疾患の診療を行っています。また、胎児心疾患診療（2019年は33例）は産科外来で、成人先天性心疾患は成人循環器科/胸部外科と共同で、主に当科が診療をしています。さらに、地域密着型の施設のため症例に偏りがなく、様々な疾患を経験できます。2019年は心臓カテーテル検査とカテーテル治療が合わせて51例、補助循環を要した劇症型心筋炎が2例ありました。

岡崎市民病院小児科：小児循環器専門医の常勤1人、非常勤1人（週1）、専門医の非常勤1人（月1）の勤務体制ですが、心エコー、ホルター心電図、トレッドミルなどの数は多く、心臓カテーテル検査も少数ですが行っています。小児の心臓手術は、早産児のPDA手術以外は他施設に依頼していますが、NICUがあるため、さまざまな先天性心疾患の初期診断と手術までの内科治療を行っています。また、3次救急病院のため、不整脈発作や心筋炎・心筋症などの心不全治療も行っています。主治医の高齢化に伴い、親子2代での遺伝性疾患の症例も出てきました。愛知県下ではトップクラスの川崎病の入院数があり、早期から治療法を組み合わせることで後遺症を残さないように日々頑張っています。もう一人常勤の循環器医が欲しいところです。

あいち小児保健医療総合センターと小児循環器専門医制度研修施設群を作っている
ので、循環器に興味のある若手医師は月 1 回の合同カンファレンスに出席したりし
ており、あいち小児での循環器・集中治療の研修することも可能です。

名城病院小児循環器科：古くから小児心臓病患者に対して取り組んできているため、経
過の長く成人に達した患者が多いことが特徴です。現在、今後の課題となる成人先
天性心疾患の患者さんに心臓外科、内科、脳外科、産婦人科、整形外科等様々な科
と連携して治療、経過観察に当たっています。また、不整脈管理、カテーテル治療
等もおこなっています。

中東遠総合医療センター小児科：指導医 1 名（浜松医科大学）・専門医 1 名（名古屋大学）
を含む 3 名で協力して診療・研究を行っています。小児循環器専門医を目指す医師
のため、静岡県内の施設と診療協力を行い、静岡県立こども病院・浜松医科大学小
児科と共に小児循環器専門修練施設群として認定を受けております。また静岡県立
こども病院・浜松医科大学小児科とは、インターネット回線を用いたネットカンフ
ァレンスを毎月開催しております。先天性心疾患の診断（胎児期含む）・治療、小児
に特有の不整脈の診断・治療、学校心臓病健診・学童生活習慣予防検診における精
密検査、病棟では主に川崎病の治療や先天性心疾患のカテーテル検査（月 1～2 回）
などを行っています。先天性心疾患の手術は主に静岡県立こども病院などへ紹介し
ますが、カテーテル・CMR 検査や心不全治療などの術前・後管理は当院で担って
おり、専攻医として赴任された場合には良い研修ができることと思います。

<日本小児腎臓学会> (<http://nephron.med.tohoku.ac.jp/jspn/>)

名称：日本腎臓学会認定医（小児科）

専門医認定学会：日本腎臓学会 (http://www.jsn.or.jp/jsn_new/index.html)

必要条件：

- ・小児科専門医であること
- ・5年継続をして日本腎臓学会の会員であること
- ・日本腎臓学会が指定する研修施設において研修を3年以上行っていること
- ・所定の経験症例の記録及び要約の提出が可能であること

a) 専門研修認定施設に必要な認定医：

- ・指導医 1 名以上および認定医 1 名以上が常勤。
- ・身体障害者福祉法の規定による更生医療担当医療機関（腎機能障害）として指定。
- ・医療法で定める特定機能病院、総合病院または日本腎臓学会が認めた透析療法の研
修施設として適切な有床施設であること。

b) 名大関連での認定医認定施設と認定医・指導医の人数

・認定医認定施設：(日本腎臓学会認定施設)

名古屋大学医学部附属病院、春日井市民病院、岡崎市民病院、名古屋第一赤十字病院、愛知県厚生農業組合連合会江南厚生病院、愛知県厚生農業組合連合会安城更生病院、地域医療機能推進機構中京病院、国家公務員共済組合連合会名城病院、名古屋掖済会病院、トヨタ記念病院、公立西知多総合病院

・腎臓指導医：

公立西知多総合病院 小児科 山田晃郎

・腎臓専門医：

地域医療機能推進機構中京病院 小児科 多代篤史

公立西知多総合病院 小児科 山田晃郎

c) 名大関連病院ごとの特徴

- ・地域医療機能推進機構中京病院：小児の腎不全を多数例扱う。腎生検も多数例。腹膜透析のフォローアップ症例も多い。
- ・公立西知多総合病院：小児の腎疾患を扱う。腎生検を行い診断および治療も可能。透析・腎移植が必要な症例は中京病院と連携し治療を行う。
- ・名古屋第一赤十字病院：小児の腎疾患を扱うが、病院が小児に関しては3次医療機関にあたるため、急性期に伴う腎疾患も多い。

d) 各分野認定医を取得するための過程や取得時期

小児科専門医を取得後、日本腎臓学会が指定する研修施設において3年以上研修を施行する。

e) 各分野認定医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

- ・大学院以外のコース：小児科専門医を取得した後に、日本腎臓学会の指定する研修施設で3年間の研修を行う。なお、日本腎臓学会の会員歴が5年以上必要なため、腎臓を選考すると決めたら小児科の後期研修を行っているうちに日本腎臓学会に入学しておくことが望ましい。
- ・大学院入学コース：在学中は研究に専念し、その後、日本腎臓学会の指定する研修施設で3年間の研修を開始することになる。
- ・社会人大学院コース：日本腎臓学会の指定する研修施設に在籍しながら研究を行うことになる。

<日本小児内分泌学会> (<http://edpex104.bcasj.or.jp/jspe/>)

名称：日本内分泌学会 内分泌代謝科（小児科）専門医

専門医認定学会：日本内分泌学会 (<http://square.umin.ac.jp/endocrine/index.html>)

必要条件（受験資格）

申請時に

- 1) 小児科専門医であること
- 2) 継続3年あるいは通算5年以上内分泌学会員であること
- 3) 認定施設で3年以上研修していること
- 4) 学会発表（または論文）5編（2編は筆頭者であること）

a) 専門研修認定施設に必要な専門医など

- 1) 常勤の指導医が在籍
- 2) 内分泌代謝の専門外来及び病棟
- 3) 内分泌代謝疾患の診療実績（継続5年以上）
- 4) 医学用書館（室）、診療記録管理室
- 5) 研修カリキュラムに基づいた教育

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・専門医認定施設：あいち小児保健医療総合センター、愛知医科大学小児科

・専門医

労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院小児科	立松 寿
なごやかこどもクリニック	上條隆司
もりもり小児科	森 理
愛知医科大学小児科	岩山秀之
岩山小児科	八田容理子
名古屋第一赤十字病院	西門優一

・指導医

愛知医科大学小児科	岩山秀之
-----------	------

c) 名大関連病院ごとの特徴

愛知医科大学小児科が専門医認定施設となっており、専門医を受験するために必要な研修を受けることが可能である。専門医認定施設ではないが、名古屋第一赤十字病院、労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院、名古屋掖済会病院でも、小児内分泌疾患の診療（外来および入院）を行っている。

・名古屋第一赤十字病院 小児医療センター：低身長、思春期、甲状腺、副甲状腺、副腎、下垂体、糖尿病など内分泌疾患全般を扱っている。外来患者数は年間 300-350 名ほど。

当院の特色としては、小児血液・腫瘍科と協力して、Childhood Cancer Survivor (CCS) に対するフォローアップを多く行っている。また、院内内分泌内科と連携して症例検討会に参加することで、暫定的な認定教育施設として専門医の受験資格を得ることも可能となっている。

- ・労働者安全福祉機構 中部ろうさい病院 小児科：糖尿病を含めた小児内分泌疾患の診療
- ・名古屋掖済会病院 小児科：低身長、糖尿病他小児内分泌疾患の診療
- ・愛知医科大学病院 小児科：入院患者数は年間 90-100 名、外来患者数は年間 400-450 名である。低身長、糖尿病、甲状腺・下垂体・副腎・性腺疾患の診療を行っている。性腺疾患は、非常に専門性の高い手術が必要なため名古屋市立大学小児泌尿器科と連携して治療にあたっている。日本内分泌学会認定教育施設（小児科）となっており、専門医を受験するために必要な研修を受けることが可能である。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

前記の必要条件を満たせば、内分泌代謝科（小児科）専門医の受験資格を得られる。
小児科専門医取得後あるいは前に、日本内分泌学会の会員となる必要がある。

e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

- ・特別なモデルコースは今のところ存在しないが、上記の 4 病院を含んだ名大関連病院で専門医、指導医と連絡を取りながら、小児内分泌疾患を経験するのが一つの方法と考えられる。全国のこども病院や他大学小児科（認定施設小児科等）で小児内分泌を学ぶという選択肢もありうる（国内留学）。
- ・内分泌・遺伝の基礎研究も重要で、希望があれば名大環境医学研究所・発生遺伝部門（林良敬准教授）での研究も可能である（研究生または大学院生）。愛知医科大学小児科でも、遺伝性甲状腺疾患の遺伝子解析や遺伝子治療、商業利用できない特殊なホルモンの分析に関する研究が可能であり、研究生または大学院生を募集している。

<日本小児心身医学会> (<http://jisinsin.umin.ac.jp/>) *小児科では専門医制度なし

名称：日本心身医学会専門医

専門医認定学会：日本心身医学会 (<http://www.interq.or.jp/japan/shinshin/>)

必要条件：

- ・小児科専門医不要（無関係）、
- ・日本心身医学会の認定施設で 3 年、会員歴 3 年
- ・心身医学に関する学会発表 3 回以上、学術論文 3 編以上
- ・学会（支部を含む）で主催した心身医学会講習を受講

a) 専門研修認定施設に必要な専門医： 1 名以上の指導医

- b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数
 - ・専門医認定施設：なし
 - ・専門医：現在のところ関連病院では不在
- e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース
 - ・現行ではモデルコースを策定することは困難である。
 - ・あいち小児保健医療総合センターにて独自の「心療科レジデント研修プログラム」がある。プログラムの詳細は、<http://www.achmc.pref.aichi.jp/5010/5010.html> を参照されたい。

<日本小児臨床薬理学会> *小児科では専門医制度なし。

名称：日本臨床薬理学会専門医

専門医認定学会：日本臨床薬理学会 (<http://www.jade.dti.ne.jp/~clinphar/>)

必要条件：小児科専門医不要（無関係）

<日本小児遺伝学会、日本人類遺伝学会、日本遺伝カウンセリング学会>

名称：臨床遺伝専門医

専門医認定学会：臨床遺伝専門医制度（日本人類遺伝学会、日本遺伝カウンセリング学会）

必要条件：

- ・社団法人日本専門医制評価・認定機構の定める基本的領域の学会の専門医（認定医），あるいは専門医制度委員会が認める専門医（認定医）である者（＝小児科学会専門医を有すること）
- ・専門医制度委員会が認定した研修施設において、臨床遺伝学の研修を3年以上行い、認定研修施設に所属する指導医の指導を受けながら、遺伝カウンセリングを含む遺伝医療を実践した者（研修開始届けの受付をもって研修開始とする。認定研修施設、指導医は下記に記載）
- ・継続して3年以上、日本人類遺伝学会あるいは日本遺伝カウンセリング学会の会員である者
- ・遺伝医学に関係した学術活動（論文発表、学会発表など）を行っているもの

a) 専門研修認定施設に必要な要件；

- (1) 専門外来として臨床遺伝医療に関する外来を開設していること。
- (2) 複数の専門医が勤務する独立した臨床遺伝医療部門があり、専門医のうち、少なくとも1名は指導医であること。
- (3) 到達目標に掲げる能力が取得でき、臨床遺伝医療に関する臨床研修が可能であること。
- (4) 臨床遺伝に関する教育的行事を定期的に開催していること。

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・専門医認定施設：

名古屋大学医学部附属病院
愛知県医療療育総合センター

・専門医：

名古屋大学医学部附属病院 小児科	加藤太一、深澤佳絵、 加藤耕治
国立病院機構名古屋医療センター 小児科	服部浩佳

・指導医：

名古屋大学医学部附属病院 精神科	尾崎紀夫
小児科	村松友佳子
愛知県医療療育総合センター 小児内科・遺伝診療科	水野誠司

c) 名大関連病院ごとの特徴

- ・名古屋大学医学部附属病院は、数多くの診療科がそれぞれに遺伝診療を行っているのが特徴的である。名大方式では各科に遺伝担当医を置き、遺伝カウンセリング室を構成している。臨床遺伝は様々な分野にまたがる領域であることから、月に1回各科合同の遺伝カンファレンスが開催され、症例検討、名大病院の遺伝医療体制の検討などが行われている。名大病院では、各科の専門診療に従事しながら、遺伝医療に関する指導を遺伝カンファレンスに出席して学ぶ体制になっている。また、認定遺伝カウンセラーによる専門的な遺伝カウンセリングも行っており、陪席も可能である。
- ・愛知県医療療育総合センターは中央病院と発達障害研究所を合わせて研修指定施設に認定されている。中央病院は先天異常症候群や遺伝性疾患の症例が豊富である。遺伝カウンセリングは年間約30名の来訪者があり専門医取得に必要な経験が積める。また発達障害研究所の遺伝子医療研究部門で分子遺伝学、細胞遺伝学の基礎を学ぶことも可能である。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

- ・基本領域の学会の専門医（＝小児科学会専門医）を取得後、臨床遺伝専門医制度委員会へ研修開始届けを提出する。その受付を持って、研修開始となる（日本人類遺伝学会会員であることが必要条件）。専門医制度委員会が認定した研修施設において、臨床遺伝学の研修を3年以上行い、認定研修施設に所属する指導医の指導を受けながら、遺伝カウンセリングを含む遺伝医療を実践すること。認定研修施設に在籍していない者については、名大病院で研修開始届けを作成し、毎月の遺伝カンファレンスの参加、学会が定める臨床遺伝に関するセミナーを受講することで研修単

位をそろえることが可能である。

- e) 各分野専門医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース
- ・研修開始届けを提出後一定数の遺伝医療の実績を積み認定試験を受ける。

<日本小児東洋医学会>

名称：日本東洋医学会専門医

専門医認定学会：日本東洋医学会 (<http://www.jsom.or.jp/html/index.htm>)

必要条件：

- ・小児科専門医、日本東洋医学会の認定施設で3年、会員歴3年
- ・50症例の一覧及び、そのうち10症例の臨床報告提出
- ・認定試験（筆記試験、口頭試問）あり

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：規定なし

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・専門医認定施設： 規定なし
- ・専門医：

公立陶生病院 小児科

山口英明

名古屋大学医学部附属病院 小児科

川島 希

<日本小児救急医学会> *小児のみの専門医制度なし

名称：救急科専門医

専門医認定学会：日本救急医学会 (<http://www.jaam.jp/index.htm>)

必要条件：

- ・小児科専門医不要
- ・日本専門医機構の基幹施設のプログラムに登録し、基幹施設と連携施設において3年間のプログラムを履修

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・専門医連携施設：

あいち小児保健医療総合センター

(名古屋大学附属病院他、基幹施設は県内に複数あるが、小児専門で基幹施設となっているところはない)

- ・専門医：

あいち小児保健医療総合センター

池山由紀

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

救急科専門医は基本領域専門医なので、日本専門医機構の専攻医研修プログラムに応募する必要がある。基幹施設に所属し、その施設の3年間のプログラムを履修する必要がある。小児を中心に研修するために小児病院が連携施設となっている基幹施設プログラムを選ぶことは可能であるが、3年間の大半は成人中心の研修となる。

※日本小児救急医学会としては、小児救急スペシャルインタレストメンバー認定制度を開始している。 : <http://www.convention-access.com/jsep/>

<日本小児リウマチ学会> *小児では専門医制度なし

名称：日本リウマチ学会専門医

専門医認定学会：日本リウマチ学会 (<http://www.ryumachi-jp.com/>)

必要条件：

- ・小児科専門医必要
- ・認定教育施設での臨床5年、会員歴継続5年
- ・筆記試験

認定研修施設：

あいち小児保健医療総合センター、名古屋大学医学部附属病院など

専門医：

名古屋大学医学部附属病院 川田潤一

<日本てんかん学会> *小児・成人で共通

名称：日本てんかん学会 認定医（臨床専門医）

専門医認定学会：日本てんかん学会 (<http://square.umin.ac.jp/jes/>)

必要条件（抜粋）：

- (1)現在まで3年以上引き続き本学会の正会員であること。
- (2)現在、てんかん診療に従事していること。
- (3)研修中に1回以上日本てんかん学会年次学術総会と日本てんかん学会地方会に出席していること。
- (4)種々の病型を含む50例の具体的なリストおよび症例詳細記述5例を提出。
- (5)てんかんに関する論文が3編あること(うち1編は筆頭著者であること)。
- (6)てんかんの診療に関して認定研修施設における3年以上の研修歴、あるいはそれに相当する研修歴があり、初期臨床研修あるいは基盤学会の専門医研修の研修期間を含めて5年以上であること。
- (7)基盤となる分野の専門医あるいは指定医などを有していること。

a) 専門研修認定施設に必要な認定医：専門医資格を有する 1 名以上の常勤の指導医

b) 名大関連病院での認定研修施設と専門医（2019 年 2 月 5 日）

・認定研修施設

名古屋大学医学部附属病院
愛知県医療療育総合センター中央病院、
安城更生病院
あいち小児保健医療総合センター
愛知医科大学

・専門医

名古屋大学医学部附属病院	夏目 淳 城所博之 中田智彦 山本啓之
愛知県医療療育総合センター中央病院	三浦清邦 丸山幸一 小川千香子
あいち小児保健医療総合センター	糸見和也 鈴木基正
愛知医科大学 小児科	奥村彰久 倉橋宏和
青い鳥医療療育センター	平岩文子
三河青い鳥医療療育センター	伊藤祐史
安城更生病院 小児科	久保田哲夫 深沢達也
名古屋記念病院 小児科	渡邊一功

c) 名古屋大学関連病院ごとの特徴

- ・名古屋大学附属病院：てんかん患者さんの数は特に多い。West 症候群など難治性てんかんの診療が経験できる。PET、3 テスラ MRI などの神経画像検査や、脳神経外科と協力して長時間ビデオ脳波モニタリング、てんかん外科の研修も可能である。脳とこころの研究センターで脳磁図や脳波・機能的 MRI 同時記録も行っている。2018 年度に愛知県てんかん治療医療連携協議会の拠点機関に指定された。
- ・安城更生病院：てんかんの症例数は多く、周生期障害の合併症としてのてんかんの症例も多い。脳波や神経画像について臨床・研究で実績がある。全般的に偏りなく研修できる可能性がある。
- ・名古屋第一赤十字病院：てんかん、けいれん重積など症例数は多い。
- ・岡崎市民病院：てんかんの患者数は多く、急性脳症に伴うけいれん重積なども多い。脳波や神経画像について臨床・研究で実績がある。全般的に偏りなく研修できる可能性がある。
- ・愛知県医療療育総合センター中央病院：障害児の合併症としてのてんかんが多いが、

それ以外のでんかん診療も経験できる。

- ・青い鳥医療療育センター：障害児に合併するでんかんの患者さんが多い。
- ・あいち小児保健医療総合センター：でんかんの患者さんは多い。
- ・愛知医科大学病院：でんかんセンターが設立され新生児から成人までシームレスな診療を行っている。また、外科的治療にも対応できる。MRI の先進的な解析も可能である。また、遺伝子解析を用いる研究も行っている。

d) 各分野認定医を取得するための過程や取得時期

小児科専門医を取得後、1年の認定施設での研修を含め、2~3年程度名古屋大学医学部附属病院か、上記の研修に適した病院でのトレーニングが必要であると思われる。認定医取得に関しては、病院により症例の内容には差があるため、2-3カ所の研修施設で診療に従事するのが理想であろう。

e) 各分野認定医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース

- ・大学院に進学する場合：最低1年は名古屋大学医学部附属病院での臨床業務に従事する。代務で神経外来を継続的に担当する。
- ・大学院に進学しない場合：上記研修に適した病院で3年研修するか、名古屋大学医学部附属病院で医員として臨床業務を行う。

<日本臨床神経生理学会> *小児・成人で共通

名称：日本臨床神経生理学会認定医 (<http://jscn.umin.ac.jp/>)

専門医認定学会：日本臨床神経生理学会

必要条件（抜粋）：

- ・臨床経験が5年以上（初期臨床研修期間の2年間を含む）
- ・日本臨床神経生理学会会員歴を3年以上有すること
- ・脳波あるいは筋電図・神経伝導の臨床的検査・所見診断に3年以上従事した経験をもつこと
- ・日本臨床神経生理学会主催の学術集会、技術講習会および関連講習会、または関連学会への参加が3年以内に2回以上あること
- ・認定研修施設あるいは認定委員会がみとめる研究施設における1年以上の研修歴を有すること

a) 専門研修認定施設に必要な認定医：規定なし

b) 名大関連での認定医（2018年10月1日）

- ・認定医

名古屋大学医学部附属病院

夏目 淳

あいち小児保健医療総合センター

糸見和也

<日本透析医学会>

名称：日本透析医学会専門医

専門医認定学会：日本透析医学会 (<http://www.jsdt.or.jp/>)

必要条件：

- ・小児科専門医であること
 - ・3年以上継続して日本透析医学会の会員であること
 - ・日本透析医学会認定施設・教育関連施設において3年以上、日本透析医学会研修カリキュラムに基づいた透析療法に関する臨床研修を終了していること
 - ・診療実績として、所定の経験症例の記録及び要約の提出が可能であること
 - ・研究業績として、日本透析医学会年次学術集会への参加が1回以上、筆頭者としての血液浄化法に関する発表1件以上、および原著（筆頭者でなくてよい）1編以上が必要である
- a) 専門研修認定施設に必要な専門医：指導医1名以上および専門医1名以上が常勤
- b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数：なし
- c) 名大関連病院ごとの特徴
- ・地域医療機能推進機構中京病院：成人領域では血液透析症例数は非常に多い。小児では腹膜透析を中心に透析医療を行っている。
- e) 各分野認定医を取得する制度を構築する上での考えられるモデルコース
- ・大学院以外のコース：小児科専門医を取得した後に、日本透析医学会認定施設・教育関連施設で3年間の研修を行う。
 - ・大学院入学コース：在学中は研究に専念し、その後、日本透析医学会認定施設・教育関連施設で3年間の研修を開始することになる。
 - ・社会人大学院コース：日本透析医学会認定施設・教育関連施設に在籍しながら研究を行うことになる。

<日本移植学会> *小児・成人で共通

名称：日本移植学会移植認定医

専門医認定学会：日本移植学会

必要条件：

- ・.移植医療に必要な経験と学識技術を修得し、臓器提供推進の重要性を理解し、

かつ医療倫理を遵守していること。臨床移植医の場合は、通算3年以上の移植医療の臨床修練を行っていること。基礎移植医(病理学、免疫学)の場合は3年以上の研究歴を持つこと。

1) 臨床経験

①腎臓移植領域 10例以上

②肝臓移植領域 10例以上

③腎臓・肝臓移植以外の領域(心臓、肺、膵臓、小腸等の移植領域) 3例以上

(臨床経験は、主治医・術者を問わずレシピエント移植手術、ドナー臓器摘出手術、脳死ドナー管理の経験、メディカルコンサルタントとしての経験および内科医としての移植、手術の術前・術後管理経験などを全て含む。また、初期研修期間の臨床経験は含まない)

2) 業績 第一著者一編を含む論文または学会抄録3編以上

- ・評議員1名による推薦が必要。
- ・5年以内に日本移植学会総会に1回以上の参加、かつ日本移植学会主催教育セミナーに1回以上の参加があること。

a) 専門研修認定施設に必要な認定医：規定なし

b) 名大関連での認定医認定施設と認定医・指導医の人数

- ・認定医：公立西知多総合病院 小児科 山田晃郎

<日本臨床腎移植学会>*小児・成人で共通

名称：腎移植認定医

専門医認定学会：日本臨床腎移植学会

必要条件：

- ・卒後6年以上で日本小児科学会専門医の資格を有すること
- ・3年以上引き続いて日本臨床腎移植学会の会員であること
- ・学術集会に1回以上の参加かつ学術集会教育セミナーに1回(2単位)以上の参加があること
- ・内科系は通算1年以上臨床腎移植医療の内科的修練を行い、必要な経験と学識技術を修得する
- ・業績として臨床腎移植関連の学会・研究会の発表または論文または著書があること

a) 専門研修認定施設に必要な認定医：規定なし

b) 名大関連での認定医認定施設と認定医・指導医の人数

・認定医：公立西知多総合病院 小児科 山田晃郎

c) 名大関連病院ごとの特徴

・地域医療機能推進機構中京病院：関連病院では小児の腎移植を扱う唯一の施設。

d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

小児科専門医を取得後、1年以上の研修、実際は症例実績記録提出のため少なくとも15～20例程の腎移植例の経験が必要であり3～5年以上の研修が必要である。

<ICD制度協議会（日本小児感染症学会など16学会・研究会で構成）>

名称：ICD（Infection Control Doctor）

認定組織：ICD制度協議会（<http://www.icdjc.jp/index.html>）

必要条件：

次の3条件を全て満たす場合、ICDに応募することができる。

- ① 協議会に加盟するいずれかの学会の会員であること（会員歴の長さは問わない）。
- ② 医師歴が5年以上の医師または博士号を取得後5年以上のPhDで、病院感染対策に係わる活動実績（感染症対策委員歴、講習会出席、論文発表）があり、所属施設長の推薦があること。
- ③ 所属学会からの推薦があること。

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：規定なし

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

・ICD：

名古屋大学大学院 ウイルス学	木村 宏
名古屋大学医学部附属病院 小児科	伊藤嘉規 川田潤一
江南厚生病院 こども医療センター	尾崎隆男 西村直子
	後藤研誠 武内 俊
名鉄病院 予防接種センター	宮津光伸
地域医療機能推進機構中京病院 小児科	柴田元博
トヨタ記念病院 小児科	原 紳也
一宮市立尾西市民病院 小児科	成瀬 宏
名古屋通信病院 小児科	佐野雅子
公立陶生病院 小児科	家田訓子 大江英之
中津川市民病院 小児科	安藤秀男 木戸真二
	安井正宏

岡崎市民病院 小児科	辻 健史
名古屋掖済会病院 小児科	西川和夫
あいち小児保健医療総合センター 感染症科	河邊慎司
名古屋記念病院 小児科	森田 誠 鈴木道雄
名古屋第一赤十字病院 小児科	吉田奈央

<日本臨床腫瘍学会> ※2006 年度に第 1 回専門医試験が開催

名称：がん薬物療法専門医

専門医認定学会：日本臨床腫瘍学会 (<http://jsmo.umin.jp/>)

必要条件：

- ・小児科専門医
- ・学会認定の研修施設にて 2 年の臨床研修
- ・がん治療に関する研究活動 5 年、がん治療に関する業績
- ・日本臨床腫瘍学会の会員歴 2 年

a) 専門研修認定施設に必要な専門医：

- ・暫定指導医 2 名、または、暫定指導医 1 名と専門医 1 名の常勤
- ・放射線治療装置、施設 IRB、病理学会認定病理専門医の勤務
- ・悪性腫瘍患者が常時 20 名以上入院、年間がんの薬物療法が 50 例以上

b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・専門医認定施設：(日本臨床腫瘍学会認定の名大小児科関連病院)
国立病院機構名古屋医療センター、地域医療機能推進機構中京病院、公立陶生病院、名古屋掖済会病院

<日本集中治療医学会> *小児・成人で共通

名称：集中治療専門医

専門医認定学会：日本集中治療医学会 (<http://www.jsicm.org/>)

必要条件：

- ・医師免許取得後 5 年以上であること
- ・小児科専門医など、指定の学会の専門医資格を別に有すること
- ・申請時に日本集中治療医学会員であること
- ・学術集會に 2 回以上の参加経験があること
- ・業績として、集中治療に関する 2 回以上の発表 (1 題は筆頭演者であることが必須。日本集中治療医学会での発表 1 題を含む) があること。また、集中治療に関する 2 編以上の学術論文 (1 編は筆頭著者であることが必須) があること。

- ・規定の勤務歴（学会認定の研修施設に1年以上の勤務歴があり、かつ、連続して12週以上の専従歴があること）を有すること。
- ・診療実績表審査、筆記試験あり

- a) 専門研修認定施設に必要な専門医：集中治療専門医
 b) 名大関連での専門医認定施設と専門医・指導医の人数

- ・専門医認定研修施設：

あいち小児保健医療総合センター

(名古屋大学附属病院他、研修施設は複数あるが、小児専門で研修可能なのは県内ではあいち小児センターのみ)

- ・専門医：

名古屋大学医学部附属病院

沼口 敦

あいち小児保健医療総合センター

池山貴也

- d) 各分野専門医を取得するための過程や取得時期

小児科専門医を取得ののち、認定施設での12週間以上の専従勤務を含む1年以上の勤務歴が必要である。12週間の専従勤務は小児集中治療室(PICU)への専従は問われず、一般的な成人を対象とした集中治療室(ICU)への専従でよい。小児科研修中の施設が認定施設であれば、1年の(専従・非専従を問わない)勤務歴はこれで代用することが可能である。12週間ではあるが小児科勤務歴が中断することを避けたい場合、認定されたPICUを有する施設に勤務することが必要となる。勤務歴とは別に、集中治療医学会への入会・学術総会への参加・学術論文の発表を必要とする。

VIII. サブスペシャリティー技能習得について

小児科研修終了後(小児科専門医取得後)には、小児科の中の各専門分野サブスペシャリティーの技能習得も可能である。サブスペシャリティーの技能を習得する方法には大きく分けて、一般大学院コース、社会人大学院コース、専門医取得を目標とした研修コースがある。分野によって異なるが、大学院コースでもその間に専門の臨床経験を積むことで各分野の専門医を取得することが可能である。さらに国内、国外への留学も可能である。身につけた専門技能は、関連病院の専門診療や大学の教員として生かされていくことになる。

- 1) 一般大学院コース

従来の大学院に入学するコースである。大学院に在籍して研究を行う。基礎研究室における研究や国内留学をして研究を行うことも指導教員との相談で可能な場合がある。

2) 社会人大学院コース

今までの論文博士に代わるコースである。関連病院勤務や大学非常勤医師として働きながら大学院に入学する。1年以内とはなるが研究に専念する期間も指導教員との相談で考慮される。

3) 専門医取得を目標とした大学院以外の研修コース

関連病院に勤務しながら専門医および専門技能取得を目指すコースである。関連病院にも専門診療を必要とする患者さんは多く、各分野の専門医も多くいる。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12 年
大学院コース											
研修医	小児科	大学 病院	初期 赴任	大学院							
社会人大学院コース											
研修医	小児科	大学 病院	初期 赴任	社会人大学院							
大学院以外のコース											
研修医	小児科	大学 病院	初期 赴任	専門医研修							

各分野のサブスペシャリティー技能を習得するには、それぞれを専門とする指導者と相談をして、効率よく研修をする必要がある。各専門分野のモデルコースなどについては次頁以降に示す。

<血液・腫瘍分野>

血液腫瘍性疾患の治療施設は、全国的にも大学附属病院や小児病院などの専門施設に限定されており、名古屋大学小児科の関連においても、名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、名古屋医療センターがそれにあたる。血液腫瘍学の特徴として、分子生物学や免疫学などの基礎医学の理解が、臨床に直結することから、一般、社会人コースを問わず、大学院に進学するのが望ましい。

1) 一般大学院コース

名大病院研修を終了後、上記の2施設あるいは、他の関連病院において0.5～1年間の研修を終了後、大学院に入学する。名大の関連病院外で研修し、大学院入学を希望する場合の入学時期は、本人の希望に沿う。大学院入学後は、それまでの血液腫瘍性疾患の診療経験に応じて、0.5～1年間、造血幹細胞移植の診療経験を

含め、専門分野の診療に従事する。後半の3年間は、病棟、外来業務は免除で研究に専念する。大学病院に在籍中の臨床経験で、診療実績を満たすことは十分可能であることから、学位と専門医を同時に取得することをめざす。大学院卒業後は、専門施設での診療に従事するほか、海外留学、専門施設での経験をへて、教員や研究職への道が開かれる。

2) 社会人大学院コース

社会人大学院の入学時期は、一般大学院入学コースと同様である。名古屋大学医学部附属病院においては、非常勤医員のポストを得ることができる。名古屋第一赤十字病院、名古屋医療センターでポストがあれば、籍をおいたまま、大学院に入学することも可能である。また、条件が許せば、3施設をローテーションすることもありうる。名古屋大学医学部附属病院では、一般大学院コースと同様に種々のセミナーをはじめ、教育的機会が与えられる。また原則として、病棟の診療に従事するが、4年間のうち、一定の期間は研究に専念することも考慮する。大学院在籍中の診療経験をもとに学位論文を作成するとともに、十分な診療実績が得られることから、専門医の取得も可能である。大学院修了後は、専門施設での診療に従事するほか、専門性をもった小児科医として地域医療に従事する道が開かれている。また、本人の希望によっては一般大学院コースと同様に、海外留学や、教員への道も開かれている。

<アレルギー分野>

アレルギー学は、最高水準の免疫学と、食品化学、栄養学、環境衛生学など幅広い専門分野の研究成果を背景として発展してきた。アレルギー疾患の標準的な治療方針に関する各種ガイドラインは整備されてきたが、専門医に求められる診療は、それを単純に患者に適応することではない。患者が抱える素朴な、しかし核心的な疑問に答えていくためには、免疫学・アレルギー学の最新知識を持って、根拠が不明確で「伝統的な」指導方針に常に疑問をもち、自分の力でそれを解決していく力量が求められる。

アレルギーは生活に密着した疾患である。保育園や学校といった地域の生活基盤に目を向けて、そのレベル向上のために社会的な啓発活動を担うことも専門医の使命であり、やり甲斐でもある。

小児アレルギー専門コースでは、教育施設で約2年間の臨床研修を行うことを軸とするが、単にその施設の診療方針を覚えるのではなく、可能であれば他のアレルギー専門施設に国内留学、あるいは基礎医学的な研究期間を持って視野を広げ、常に自分の経験や知識を批判的に見直す力を養成したい。

1) 一般大学院コース

学内に教員が不在のため、選択できない。同門の教官が在籍する他大学への入学は選択可能である。

2) 社会人大学院コース

教授の許可があれば、学外の教育施設（あいち小児保健医療総合センターなど）に身分を置き、約 2 年間の臨床研究を行った後、1～2 年間名古屋大学内又は学外の研究施設で基礎研究に専念する。意欲があれば、海外留学について相談に応じる。

3) 大学院以外のコース

小児科後期研修を終了した後、教育施設に在籍して臨床研修を受ける。できれば、国内留学を含めて複数の教育施設で経験を積むことが望ましい。

<感染症分野>

ウイルス感染免疫と深くかかわりのある小児感染症学会には独自の専門医制度はない。感染症学会が認定する専門医制度があり、主として内科感染症医を対象としている側面はあるが、感染症分野での専門家として取得する意義がある。名古屋大学附属病院は認定研修施設であるため、大学院を終了すれば専門医受験資格を得る。次に、Infection Control Doctor (ICD) は専門医ではないが、病院内の感染対策業務を行ういわゆる Infection Control Team (ICT) として活動するのに求められる資格であり、取得が勧められる。ICD には小児感染症分野において、ウイルス感染症のみならず、細菌感染症も含めた幅広い知識が要求される。ウイルス感染症は、非常に幅の広い疾患であるため、他の疾患の専門グループや他科との連携が欠かせない分野である。そのため、専門的な治療手技は持たないかもしれないが、活躍の場は非常に広い。ウイルス疾患が如何に生じるのか、なぜその診断法を用いるのか、どうしてこの治療を適用するのか、などの臨床的疑問に対応するためには、感染免疫の基礎的理解が非常に重要と考える。将来、感染免疫研究に専念したいという者はもちろんのこと、優秀な臨床医を目指す者にこそ、分子生物学や細胞生物学・免疫学などの基礎的研究は有用である。よって、大学院に進学し一定期間基礎的研究すること薦めている。一般大学院・社会人大学院、いずれのコースも可能である。

1) 一般大学院コース

名大病院研修を終了後であればいつでもよい。名古屋大学大学院ウイルス学講座での基礎的な研究も可能である。当研究室では、ほぼ毎年大学院入学者が存在し、大学院卒業後は、積極的に海外留学を奨励していることもあり、過去 20 年間で 8 名が海外留学している。現在、研究機関・施設で教員・部長として働くものも多い。全般的に、専門的知識・経験を生かして感染症臨床に従事するあるいは臨床研究を行うなど幅広い活動をしている。

2) 社会人大学院コース

入学時期は一般大学院コースと同様である。ウイルス研究室関連臨床施設（あいち小児保健医療総合センター感染免疫科など）で臨床に従事しながら、臨床ウイルス学研究を行う。一定期間（少なくとも 1 年間）はいずれかの研究施設で基礎的研究を行う

ことが望ましい。

<神経分野>

小児神経疾患はあらゆる病院の入院患者さんや外来において経験するが、詳しく小児神経学を学ぶためには名古屋大学病院や基幹施設である名古屋第一赤十字病院、安城更生病院、岡崎市民病院、あいち小児保健医療総合センターなど、さらには障害児を専門に診療する愛知県医療療育総合センター、青い鳥医療療育センター、豊田市こども発達センターにおいて、指導者のもとで経験を積むことが望ましい。名大病院研修終了後は大きく分けて以下の3つのモデルコースが考えられる。

1) 一般大学院コース

大学院生として名古屋大学で専門研修、研究を開始する場合、最初の1年間は大学の神経外来および入院患者の診療に従事することで、小児神経学の臨床経験を積み研究の準備も行う。同時期に脳波判読などの専門技能習得も行う。その後は臨床業務を免除され研究に専念することができるが、臨床研究に関連する外来や病棟業務を継続することを希望する場合は継続も可能である。また学外の研究施設で研究を行うことも可能である。現在、岡崎の生理学研究所における神経生理学的研究、愛知県医療療育総合センター発達障害研究所や福岡大学で小児神経疾患の遺伝子研究を行っている者がいる。小児神経学会専門医取得のための臨床経験は大学院中にも積むことが可能である。卒業後は基幹病院や専門施設での診療、国外留学も可能である。

2) 社会人大大学院コース

社会人大大学院に入学した場合、大学の医員として、または関連病院に勤務し小児神経臨床研修を行いながら大学院生として臨床研究も行う。前半を関連病院、後半を大学で医員として勤務することも可能である。関連病院に勤務する場合、可能であれば小児神経の指導者のいる基幹病院で臨床研究を行うことを考慮する。研究をまとめるため1年以下の研究に専念する期間も考慮される。1)のコースと同様に専門医取得のための臨床経験を積むことが可能である。卒後は1)と同様に基幹病院や専門施設での診療、国外留学などが可能である。

3) 大学院以外のコース

学位よりも専門医の取得に主眼を置いたコースである。大学の非常勤医員として、または関連病院に勤務し小児神経の臨床研修を行いながら日本小児神経学会専門医取得を目指す。同専門医取得には連続して5年以上の会員歴、症例要約、学会出席や発表、論文執筆、小児科学会など基本領域の学会の専門医などが必要であるが、これらは大学病院や基幹病院での診療、研修で取得可能である。いずれのコースも、てんかんの診療、研究を行い日本てんかん学会の認定医（臨床専門医）を取得することも有用である。

<周産期・新生児分野>

周産期専門医（新生児）は小児科専門医取得後に研修を開始することができるため、大

学病院研修終了後に速やかに小児科専門医を取得することが望ましい。周産期専門医（新生児）の研修期間は3年である。名古屋大学小児科関連施設では、名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院、大垣市民病院、安城更生病院が周産期専門医（新生児）の研修における基幹施設である。また、公立陶生病院、トヨタ記念病院、岡崎市民病院、江南厚生病院は研修指定施設である。

1) 一般大学院コース

基本的に病棟業務は行わずに、研究に専念するが、専門医研修を開始する意味で、大学院4年間の中で最初の0.5年間および最後の0.5年間は、病棟勤務を行うこととする。大学院修後は関連の研修施設へ異動をして、研修を継続する。大学院修了後に、国内外の研究施設での研究を希望する場合は、留学を優先として、留学後に研修の再開を考慮する。

2) 社会人大学院コース

学会の指定する研修施設に籍を置きながら、名古屋大学新生児関連施設研究ネットワークのシステムに基づき、臨床研究を開始する。基本的に大学院4年生で、大学に籍を移して、研究のまとめを行うこととする。

3) 大学院以外のコース

大学病院研修終了後または初期赴任後（小児科専門医取得後）に学会の指定する研修基幹施設、研修指定施設へ異動をし、研修を開始する。

<免疫分野>

1) 一般大学院入学コース

原発性免疫不全症候群の理解のためには基礎免疫学の知識が必須であること。疾患の診断、病態解明を行なうためには細胞生物学的、分子生物学的研究技術の修得が必要であること。稀な疾患であり、ほとんどの症例が大学に集積していることなどから大学院入学により知識、技能を習得することを強く勧める。大学院卒業後は希望により海外留学も可能である。

2) 社会人大学院コース

上記理由により大学院以外のコースは基本的には勧めない。

3) 大学院以外のコース

上記理由により大学院以外のコースは基本的には勧めない。

<循環器分野>

1) 一般大学院コース

臨床上の視点も重要であり大学院4年間のうち6ヶ月～1年間は時間内の病棟業務は行うものとする。関連外施設での研究を希望する場合その目的などと照らし合わせて許可を得られることを条件とする。大学院修了後は関連の専門施設へ異動して研修を継

続する。大学院修了後の国内外での研究の希望がある場合も相談に応じる。

2) 社会人大学院コース

関連の専門施設において研修を行いながら臨床研究を開始する。途中で約 2 年大学院に籍を移して研究のまとめを行う。

3) 大学院以外のコース

大学病院研修終了後または初期赴任後に関連の専門施設での研修を行う。

<腎臓分野>

単に小児の腎・尿路疾患のみでなく、広く腎・尿路の生理・病態に関する知識が必要となる。体液（水・電解質）、高血圧（血圧調節）、慢性腎不全（保存期を含む）、急性腎不全、透析療法、腎移植なども重要な事項である。更には、成人の腎疾患（糖尿痛腎症や膜性腎症など）に対する一般的な知識も必要であるが、学会や研究会への参加などによって習得可能である。並行して（ほぼ同時期に）日本透析医学会専門医を取得するための研修も、在籍する研修施設によっては可能である。

1) 一般大学院入学コース

在学中は研究に専念し、その後、日本腎臓学会の指定する研修施設で3年間の研修を開始することになる。

2) 社会人大学院コース

日本腎臓学会の指定する研修施設に在籍しながら研究を行うことになる。

3) 大学院以外のコース

小児科専門医を取得した後に、日本腎臓学会の指定する研修施設で3年間の研修を行う。なお、日本腎臓学会の全点歴が5年以上必要であるため、腎臓を専攻すると決めたら小児科の後期研修を行っているうちに日本腎臓学会へ入会しておくことが望ましい。

<内分泌分野>

大学小児科医局内に専門医・指導医資格を有する教員はいない。関連病院では、愛知医科大学小児科のみが専門医認定施設となっている。小児科研修終了後、専門医認定施設で 3 年間の専門研修を行い、専門医および専門技能取得を目指す。本人の希望によっては、他の小児内分泌専門施設に国内留学、あるいは大学院進学または海外留学をして小児内分泌の研究を行うことも可能である。指導医を目指す場合は、指導医申請にあたり連続 10 年以上、日本内分泌学会の会員であることが必要のため、早めに入会することが望ましい。

1) 一般大学院入学コース

学内に教員が不在のため、選択できない。同門の教官が在籍する愛知医科大学への大学院入学は選択可能である。

2) 社会人大学院コース

学外の専門医認定施設（あいち小児保健医療総合センター内分泌代謝科など）で、約 2 年間の臨床研究を行った後、1-2 年間、名古屋大学内又は学外の研究施設で基礎研究に

専念する。

3) 大学院以外のコース

小児科後期研修を終了した後、専門医認定施設に在籍して専門研修を受ける。できれば、国内留学を含めて複数の専門医認定施設で経験を積むことが望ましい。

<代謝分野>

大学に教員のいない現状では研修は非常に困難である。先天代謝異常症に興味をもたれた時には、分子遺伝学的研究の可能な国内他施設で研修を行うことになる。

<遺伝分野>

研修開始届けを提出後、一定数の遺伝診療の経験を積むことが必須である。モデルコースとしては症例数の多い病院（主に愛知県医療療育総合センター中央病院）で診療の実績を積む臨床中心のコースと、大学院で分子遺伝学的研究に従事しながら非常勤で臨床経験を積む方法に大別される。

- 1) 愛知県医療療育総合センター中央病院に勤務して臨床遺伝診療に従事する。
- 2) 愛知県医療療育総合センターまたは名古屋大学医学部附属病院に研修届けを提出後、遺伝医学セミナーに参加してポイントをためながら症例数の多い病院で勤務する。
- 3) 遺伝性疾患を対象とする他のグループの研究に従事しながら、平行して愛知県医療療育総合センターまたは名古屋大学医学部附属病院に研修届けを提出し、遺伝医学セミナーに毎年参加してポイントを増やしつつ、症例数の多い病院に非常勤として勤務する。遺伝性疾患を対象とする他グループで研究を行いながら臨床遺伝専門医を取得することは十分可能である。

<救急・集中治療分野>

愛知県内では、小児救命救急センター（小児集中治療室（PICU）16床含む）が稼働しており、認定施設であるあいち小児保健医療総合センターで体系的な研修が可能である。大学内他部門（救急・内科系集中治療部など）は小児専門ではないが、専門医を有する教員がいる。小児科研修終了後、3年間の専門研修を行い十分な臨床経験積み、専門医および専門技能取得を目指す。

本人の希望によっては、大学院進学または海外留学をして研究を行うことも推奨される。

1) 一般大学院入学コース

学内に教員が不在のため、現在は選択が難しい。

2) 社会人大学院コース

学外の専門医認定施設（あいち小児保健医療総合センター救急科・集中治療科な

ど)で、約2年間の臨床研究を行った後、1-2年間、名古屋大学内又は学外の研究施設で研究に専念する。

3) 大学院以外のコース

小児科後期研修を終了した後、専門医認定施設に在籍して専門研修を受ける。意欲があれば国内留学、海外での研究留学などの相談に応じる。